『文心雕龍』雑説（四）

安東　諒

正緯第四

劉勰が宗経の観点から緯書を糾正しようとしたから正緯だ、と詹鍈は言う。緯書の偽点を糾正せんが為の設篇である。その結果、真なるものを斟り酌んで文章表現に役立てるのが、劉勰の本意意図である。序志篇の（酌乎緯）の酌は斟酌で、照合しつつ取捨選択する必要があるということである。言うまでもなく宗経の観点から、経書と照合する訳である。それが下文にある経書との四同四異となる。冒頭の原道（本乎道）篇は、文章が自然の道に本づくことを説き、続く徵聖（師乎聖）、宗経（体乎経）篇が聖人と経書の全的肯定で有ったのに対して、本篇と次篇は部分的肯定である。部分とは、文章表現における、形式面からの修辞においてである。だから、本篇の末節に「無益経典、而有助文章」の故に設けられた、とある。次篇の「弁騒篇」もまた同じ。「文章に助け有り」とは、文章表現において助力となる、ということであろうが、文章とは美的形式面からの有効性としての文辞采藻（華美・綺麗など）の語彙（本篇末節の「是以古來辭人、捃摭英華」の英華をも意味する）の綾紋（あやもよう）を指す語である。こちらの方が文章の語の原義であった。

「根據上引諸論、可見讖與緯性質不同、緯與經義有關、讖爲預決吉凶之書。惟近人陳槃考證、以爲讖緯不分、緯固附經、而讖亦未嘗不然。至其先後之序、則先有〈河圖〉〈洛書〉然後有由此而産生之讖、然後始有緯」（「讖緯釋名」（歴史語言研究所集刊第十一本）と詹鍈の『義證』にある。讖緯の別は内容の相違ではなく、制作時の先後だと陳槃は解している。讖・緯の区別呼称はすっきりしないが、王忠林の『文心雕龍析論』（三民書局）に「占験からは讖、経に付せば緯、河図類の図のあるものは図または籙、占候術からは候、瑞応からは符と称び、漢代にはこれらは通称の互文であった」と先掲の陳槃の論文を参考にして説かれている。王は次いで、緯書の始源を劉師培の鄒衍説、更に溯って殷代の甲骨卜辞にまで徵している。「舎人の意図は〈箴時〉にあった」と『校證』にある。「河圖緑書」は真緯、後世術士の書は偽書だと劉勰は考えている

と斯波は解している。その偽書なるものは、経書を漢代に盛んになる神秘思想（天人相関や陰陽五行や災異説など）でもって解説敷衍したものである。漢代から六朝を通じて、時の権力と密接する夥しい緯書が出て、それが有形無形の影響を与えたので、禁止の令もまた幾度か出る。しかし、それが完全に禁絶することは無かったようだ。劉勰の生きた斉・梁の時代にもそれはなお流行著しいものが有ったからこその、取捨選択のすすめが説かれたのが本篇であろう。逸文を収拾した叢書などを見ると、その広大さが少しは偲ばれる。王達津や牟世金や卓支中らの緯書関係の論文中には、本篇引用の緯書の内容と関わる文が揚げられ、懇切詳細な比較検討がなされている。緯書中の文辞麗藻が創作者にとっては、かなりの魅力であった節もある。

仏教では外典（ゲ）、基督教では偽典（ギ）（旧約の正典と外典に選ばれなかったもの）、儒教では緯書と称ぶが、外典は経典（キョウ）（経論）の外つまり論外だが、偽典、緯書倶に聖典、経書（ケイ）と密接に関わる。異教異端（儒教にとって異端は、普通には諸子百家を指すらしいが、趙宋以後になると西洋のそれに似て自教内部の対立派を指すようになっていく。基督教も同じで、異教異端は全く外部の無関係派の呼称ではない）は、攻むべからずだが、無視はできない。それは自派の思想・宗教の存亡に関わって来るから。異端とは、いつの時代にも自認正統派が、対立する派に対しての呼称であって、異端のない正統もなければ、正統のない異端も本来有り得ない。それを決定するのは、時代の趨勢と勢力関係だと言えるだろう。バラモン教と仏教、ユダヤ教と基督教の関係がそうである。

［一］夫神道闡幽、天命微顯。馬龍出而大易興、神龜見而洪範耀。故繫辭稱、河出圖、洛出書、聖人則之。斯之謂也。但世敻文隱、好生矯誕。眞雖存矣、偽亦憑焉。

（夫レ神道ハ幽ヲ闡キ、天命ハ顯ヲ微ニス。馬龍出デテ而シテ大易興リ、神龜見ハレテ而シテ洪範耀ク。故ニ繫辭ニ稱ス、河ハ圖ヲ出シ、洛ハ書ヲ出シ、聖人ハ之ニ則ル、ト。斯ノ謂ナリ。但ダ世ハ敻カシニテ文ハ隱レ、好ク矯誕ヲ生ズ。眞ハ存スト雖モ、偽モ亦タ憑レリ）

「夫神道闡幽、天命微顯」は、『周易』繫辞下の「夫易、彰往而察来、而微顯闡幽」を典拠としている。過去は過ぎ去ったことだから彰らかにし得、未来は未だ来ずと雖も推察することはできる。これが過去は微顯、未来は闡幽の意味であろう。韓康伯の注は「易無往不彰、無来不察、而微以之顯、幽以之闡、闡、明也」となっていて、「微顯」「闡幽」の二語のどちらかを倒置せねば文意が通じない解になっている。だからこの二語は「難解な語だ」と斯波は言う。勿論、難解の因は、二語の明（顯）暗（幽）の方向が逆（思考の流れが同一方向をとってをるとはいえぬ――斯波の語）になっていることへの疑問である。これはそんなに難しく解する必要は無い

のではないかと思う。この一句は神道と天命は、世の事物を明から暗の方へまた暗から明の方へ解明する作用が有ると言っているのだろうと思う。双方向からの作用を言う用意周到な表現である。神道と天命は互文である。そう解けば、韓康伯の解は過穿であろう。「神道」は「微妙無方、理不可知、目不可見、不知所以然而然、謂之神道」と『易』観卦の彖辞の正義にある。馮春田の『文心雕龍語詞通釋』（以下『語釋』と略称）に「指神霊或鬼神之道」とある。理知の目では見え難く、この世を動かしている神秘的原理のようなものが、確かに存在する。人事の半ば必然的明晰性に比せば、自然の道理も天道の志向も確かに解き難い謎に包まれた玄妙性を持つ。経書の発生もそのような神秘性と玄妙性に因ったのだと続いている。その神秘性と玄妙性を体得敷衍できたのは、劉勰の論では聖人だけだった。

「さて「神道」と「天命」とは、ほぼ同じ内容であって、一は抽象的な理法の上から呼び、一は具體的な作用の上から呼んだものであらう。また「幽」と「微」とは、同じく捕へどころのない奥深さを意味してゐて、一は姿からいひ、一は働きの上からいったものであらう」と斯波は結論している。神道と天命はそうであるかもしれないが、ほぼ同内容なら互文にした方が解し易い。幽と微を対字にしてしまうと、劉勰の意図を逸れてしまい、韓康伯と同じようにまたなってしまうのではないだろうか？

「夫神道闡幽、天命微顯」の句に私感を付せば、これは起源論の考察の困難性を劉勰なりに解決せんとする苦心の想定であったに違いない。何事も起源の考察に確証は無い。旧約の創世記にしろ、中国・日本の天地剖判の創世神話にしろ、その初源論には常に神秘性と不可知性を付帯する。この句を単に起源論と解すれば、それは暗黒から朦朧、朦朧から明晰への一筋道だから、「幽を闡（あき）らかに、微より顯へ」と解するのが無難な解決策だろうと思う。蛇足だが、劉勰の自作「梁建安王造剡山石城寺石像碑」の冒頭文に「夫道源虚寂、冥機通其威。神理幽深、玄徳思其契」とある。

「馬龍出而大易興、神龜見而洪範耀」「故繫辭稱、河出圖、洛出書、聖人則之」神道と天命の顕現が馬龍と神亀の出現による易と書となる。その前段階としての河図と洛書の緯書の図書に則りそれらを人文社会化（倫理規範化）した経書としたのが聖人であると。

「但世夐文隠、好生矯誕。眞雖存矣、偽亦憑焉」だが、そのことのなされた世は遥遠の古昔ゆえに文章はすでに隠曲し明確でない。そこには真理ももちろん存するが、虚偽もまた遥遠のゆえに託けられて混在する。「好生矯誕（託）」について、斯波に詳説がある。

[二] 夫六經彪炳、而緯候稠疊、孝論昭晳（木作才）、而鉤讖葳蕤。按經驗緯、其僞有四。蓋緯之成經、其猶織綜。絲麻不雜、布帛乃成。今經正緯奇、倍擿千里。其僞一矣。經顯聖訓也、緯隠神教也。聖訓宜廣、神教宜約。

而今緯多於經、神理更繁。其僞二矣。有命自天、迺稱符讖。而八十一篇、皆託於孔子。則是堯造緑圖、昌制丹書。其僞三矣。商周以前、圖籙頻見、春秋之末、羣經方備。先緯後經、體乖織綜。其僞四矣。僞既掊摘、則義異自明。經足訓矣、緯何豫焉。

（夫レ六經ハ彪炳ニシテ、而シテ緯候ハ稠疊ニ、孝論ハ昭晳ニシテ、而シテ鉤讖ハ葳蕤ナリ。經ヲ按ジテ緯ヲ驗スルニ、其ノ僞ニ四有リ。蓋シ緯ノ經ヲ成スヤ、其レ猶ホ織綜ノゴトシ。絲麻ハ雜ハラズシテ、布帛ハ乃チ成ル。今、經ハ正シク緯ハ奇ニシテ、倍擿スルコト千里ナリ。其レ僞ノ一ナリ。經ハ顯ニシテ聖訓ナリ、緯ハ隱ニシテ神教ナリ。聖訓ハ宜シク廣ナルベク、神教ハ宜シク約ナルベシ。而ルニ今、緯ハ經ヨリモ多ク、神理ハ更ニ繁シ。其レ僞ノ二ナリ。命有リテ天自リス、迺チ符讖ト稱ス。而ルニ八十一篇ハ、皆孔子ニ託ス。則チ是レ堯ガ緑圖ヲ造リ、昌ガ丹書ヲ制ス。其レ僞ノ三ナリ。商周ヨリ以前ハ、圖籙頻リニ見ハレ、春秋ノ末ニハ、羣經方ニ備ハル。緯ヲ先ニシ經ヲ後ニスルハ、體ハ織綜ニ乖ク。其レ僞ノ四ナリ。僞ノ既ニ掊摘スレバ、則チ義ノ異ナルコト自ヅカラ明ラカナリ。經ハ訓フルニ足レリ、緯ハ何ゾ豫ラン）

「夫六經彪炳、而緯候稠疊、孝論昭晳、而鉤讖葳蕤」　彪炳（あやもやうのはっきりと美しいさま）と昭晳（すぢみちのはっきりをるさま）は、互文的用法だ、と斯波（訳も斯波）。稠疊・葳蕤共に、緯書の繁多・衆多を言う。六経と孝経・論語ともに内容と形式のバランスが取れているのに対して緯・候・鉤・讖の讖緯類は繁多であると言うのであろう。

「按經驗緯、其僞有四」以下に緯書の虚偽の点を四点指摘する。按の字は、唐写本の酌の字の方がいい、と橋川時雄（『義證』に引く橋川の『文心雕龍校讀』謄写版（筆者は本書を未見だが、前五篇のみ、と詹鍈は記している））は言う。

「蓋緯之成經、其猶織綜。絲麻不雜、布帛乃成。今經正緯奇、倍擿千里。其僞一矣」斯波は『釈名』の「緯、圍也、反復囲繞以成經也」を引いて、「はたいとでも、経は軸にあり緯は杼にあって、経が本體である」と説いている。絹糸と麻糸が経緯正しく織られてこそ、布帛は完成する。所が今、経は正常だが、緯は奇異で乖離が著しい。緯書の虚偽の一点である。范注に引く孫詒讓の『札迻』に「倍擿猶言背迕也」とある。「背迕は、そむきさかふ意だ」「倍擿の語は他に用例を見ない」「もと適か摘に作られてゐたのを、後人が「倍適」（または倍摘）の意味を解しかねて、妄りに「擿」に改めたのが今本であらう」と斯波は推察する。

「經顯聖訓也、緯隱神教也。聖訓宜廣、神教宜約。而今緯多於經、神理更繁。其僞二矣」経書に対して緯書の多量からの虚偽を指摘している。劉勰の論理展開に欠けているものは、緯書の発生に対する厳密な考証ということであるが、当時の劉勰にそれを求めることは、無理であろう。「合理的な儒教を正統思想とすると、果たして緯書の思想を異端の思想と言い

うるかということが、疑問となってくる。むしろ、儒教思想が神秘的に傾斜したものが、緯書の思想であると言った方が、妥当であるかもしれない」「緯書は、「迷信への堕落」（武内義雄の『中国思想史』の語――筆者注）としての産物でなく、儒教の経典が神秘的に解釈されたもの」（一一頁～一二頁）と安居香山は『中国の神秘思想』（平河出版社）に説いている。「漢代の正統思想は緯書である」とまで安居は言っている。勿論、劉勰にはこの視点は皆無だし、現代においてもなおこれは主流の理解ではない。漢語において異端思想とは、普通には、諸子百家の思想を指す。宗教で言う「異教」「異安心」である。ここで言う異端はあくまで儒教との相関的概念としての異端、つまり同祖概念である。劉勰もその意味で使用していることは間違いない。安居もそれは同じである。

「有命自天、迺稱符讖。而八十一篇、皆託於孔子。則是堯造緑圖、昌制丹書。其偽三矣」劉勰は、符讖は天命の降下したものであると信じている。古聖賢の託言だとは信じられないのである。「符は讖と緯の総括語であり、六経に関するものを緯といい、古聖賢の言に仮託したものを讖という」と張立齋の『文心雕龍注訂』（以下『注訂』と略称）にある。斯波は「このやうに、緯書は孔子の作であると古くからいはれてゐたのであるが、これはそもそも誰が言ひ出したのであらうか。或ひは緯書そのものの中に、そのことが書かれてゐたのではなからうか。かう考えて緯書の残文を探したところ、次の二条を得た」と言い、「尚書緯と孝経鉤命決との二条に拠って推せば、讖緯書の文中にそれが孔子の作である旨を述べた記事が、他にもまだ多く有ったものと思はれる」と推定している。恐らくこれは斯波の推測どおりであろう。またこの推測はもっと重要なことをも暗に私たちに教えてくれる。それは経書と緯書の全ての関係にこの推測は妥当するのではないだろうか、ということである。緯書は後起のものであるから、自分の側の主張に都合の好いように書けば書けないこともない、ということである。丁度、『新訳聖書』が『旧約聖書』を巧みに継ぎ接ぎし、その存在の主張を正統化したと同じように。（吉本隆明『マチウ書試論』参看――筆者注）もし相違があるとすれば、以後の時代の趨勢が緯書の作者の側に味方しなかっただけのことである。八十一篇の数合わせは『隋書』経籍志六藝緯類序を引いて黄叔琳注と范注に詳しい。「神理」は（事物自身の）自然の理を言うのが原道篇に使われている普通の意味（「誰其尸之、亦神理而矣」「莫不原道心以敷章、研神理而設教」）だが、ここでは緯書の記述中の鬼神・神霊の理であって、劉勰が自然発生だと信じている下文の天命としての符讖や休命としての圖籙とは異なること、下に斯波の説くとおりである。蛇足だが、蔣祖怡の『文心雕龍論叢』（上海古籍出版社）に「論《文心雕龍》中的〝神〟〝理〟〝術〟」という神・理・術の関係を説く示唆に富む一文がある（二〇～二八頁）。

「緑圖」緑を録に作る版本もある。『楊校』に『説文』の「録、金色也」を引く。書かれていた図の色が、緑色ではなく黄金色だと言うのである。

「商周以前、圖籙頻見、春秋之末、羣經方備。先緯後經、體乖織綜。其僞四矣」図録は唐写本は緑図に作る。経緯の書の制作年代の先後が、織綜の経先緯後の順序に乖離すると。しかし、それもまた斯波の推察のように、緯書制作者が設えた仕掛けであった。

「僞既掊摘、則義異自明。經足訓矣、緯何豫焉」

「僞既掊（倍）摘」「この句は、緯書の偽なることを四点から論じた上文のしめくくりである。それで黄注に言へるが如く、「倍」は「掊」の誤と見るべきであらう。「掊摘」は、「発摘」「抉摘」などと同じ構成の語で、さきあばくの意。つまり、緯書の偽なることを十分さきあばいたといふのである」と斯波。この項は李詳補注と併見すると分明である。

以上を纏めれば、経緯の書の正奇・簡繁・真孔託孔・後先の指摘が、緯書が偽典である四証ということらしい。これらが生じた原因は、先述の通り、全て緯書制作者の側の正統の主張からの故意の仮託によるものであった。これは、後起後発の思想・宗教が先起先発のそれを乗り越え打倒する為の常套手段である。

［三］原夫圖籙之見、迺昊天休命。事以瑞聖、義非配經。故河不出圖、夫子有歎。如或可造、無勞喟然。昔康王河圖、陳於東序、故知前聖符命、歴代寶傳。仲尼所撰、序録而已。於是伎數之士、附以詭術、或説陰陽、或序災異。若鳥鳴似語、蟲葉成字、篇條滋蔓、必假孔氏。通儒討覈謂、僞起哀平。東序秘寶、朱紫亂矣。至於光武之世、篤信斯術。風化所靡、學者比肩。沛獻集緯以通經、曹褒撰讖以定禮。乖道謬典、亦已甚矣。是以桓譚疾其虚僞、尹敏戲其浮假、張衡發其僻謬、荀悦明其詭託。四賢博練、論之精矣。

（夫ノ圖籙ノ見ハルルヲ原ヌルニ、迺チ昊天ノ休命ナリ。事ハ以テ聖ヲ瑞トスルモ、義ハ經ニ配スルニ非ズ。故ニ河ハ圖ヲ出サズ、夫子ガ歎有リ。如シ或ヒハ造ル可クンバ、喟然ヲ勞スルコト無ケン。昔、康王ノ河圖、東序ニ陳ネラル、故ニ知ル前聖ノ符命ハ、歴代寶トシテ傳ヘラリシヲ。仲尼ノ撰スル所ハ、序録ノミ。是ニ於テ伎數ノ士ハ、附スルニ詭術ヲ以テシ、或ヒハ陰陽ヲ説キ、或ヒハ災異ヲ序ス。鳥ノ鳴クハ語ニ似テ、蟲ノ葉クフハ字ヲ成スガ若キモ、篇條ゴトニ滋蔓シテ、必ズ孔氏ニ假ル。通儒ハ討覈シテ謂ヘラク、僞ハ哀平ヨリ起ルト。東序ノ秘寶モ、朱紫亂レタリ。光武ノ世ニ至リテ、篤ク斯ノ術ヲ信ズ。風化ノ靡カス所、學者肩ヲ比ブ。沛獻ハ緯ヲ集メテ以テ經ニ通ジ、曹褒ハ讖ヲ撰ビテ以テ禮ヲ定ム。道ニ乖キ典ヲ謬ルコト、亦タ已ニ甚シ。是ヲ以テ桓譚ハ其ノ虚僞ヲ疾ミ、尹敏ハ其ノ浮假ヲ戲レ、張衡ハ其ノ僻謬ヲ發キ、荀悦ハ其ノ詭託ヲ明ラカニス。四賢ハ博練ニシテ、之ヲ論ズルコト精シ）

「原夫圖籙之見、迺昊天休命。事以瑞聖、義非配經。故河

不出圖、夫子有歎。如或可造、武勞喟然」「原夫圖籙之見、迺昊天休命」この二句は、上文の「有命自天、迺称符讖」と呼応し、「事」は、図籙の見はれるといふその事自體。「義」は図籙のもつ意味あひ、役割、と斯波は見る。ここで劉勰は、古代の符讖や圖籙は、自然発生であって、後代（王莽の符命から哀帝・平帝のそれらまで）の意図的作為物とは区別して考えている。「故河不出圖、夫子有歎。如或可造、無勞喟然」（だからこそ「黄河から図が現われぬ」といって、孔子は嘆いたのだ。もしそれが人の手で作れるものなら、ため息をつくにはあたるまいに）は、興膳宏の熟れた訳である。筆者は「意図的作為物とは区別して考えている」と書いた。しかし、そんなことが果たして許されるのだろうか。これは研究者の多くが思うことである。李炳勛は「彼の緯書に対する批判は徹底していない。彼は緯書の大げさで真実味のないことを指摘する一方で、神道・天命・河図・洛書の根拠のない話は信じている。これらの話は、緯書の神学迷信の話と何処が違うのか」（『文心雕龍理論体系新論』（文心出版社）（三一～三二頁））と痛い所を衝いて正論を吐いている。だが、科学から、文学を論じても少しも面白くはないことも、確かなことだ。好みで言えば、筆者は荘子に在るおおぼら話が好きだ。

「昔康王河圖、陳於東序、故知前聖符命、歴代寶傳。仲尼所撰、序録而已」尚書・顧命と康王之誥はもともと一篇であったが後に分篇して二篇となったのは、堯典と舜典のそれと同じである、と詹鍈は言う。「「符命」の語は、何時頃からおこったか知らないが、漢書の王莽伝に頻りに見えるものなどが、比較的古い用例であらう。（詹鍈は、『漢書』王莽伝の「告安漢公莽爲皇帝」の文を引き、符命はこれより始まったことを指摘している――筆者注）天が或るしるしで有徳者に対して意思表示をなせるものをいふ。ここでは河図洛書の類を指す。上文に出た「符讖」も「図籙」も、この「符命」も、語の成り立ちこそ違へ、意味するところはほぼ同じである」と斯波。「序録」は『経典釈文』の序録のようなものではなくて、符命の意味することを陳序して記録したもの、または図録の意味を陳序したものではないだろうか、と斯波の解は常に周到である。

「於是伎數之士、附以詭術、或説陰陽、或序災異。若鳥鳴似語、蟲葉成字、篇條滋蔓、必假孔氏」「於是」は、下文の「必假孔氏」までを支配すると見る。そして孔子が序録を作ったものだから、それをよいことにして、伎数の士の附加せるものをすべて孔子に仮託した、といふ意味に解したい」と斯波は言う。「於是」の管到は斯波の指摘通りであろう。伎は唐写本に、技に作るのは誤りだ、と橋川は言うが、穿鑿に過ぎよう。「「伎数」は、後漢書の李賢注（『後漢書』桓譚伝の「今巧慧小才伎数之人、増益図書、矯稱讖記」の注を指す――筆者注）に「伎、謂方伎、医方之家也、数、謂数術、明堂羲和史卜之官也」と斯波。つまりは、悪知恵小細工の利く徒輩や技術命数に長けた家官らのでっち上げを孔子に託けたということになろう。鳥鳴語や虫葉字もまた悪知恵と小細工の一種

であった。これらの典拠を経書に徴している黄叔琳・范文瀾に対して、斯波は疑問を呈して緯書を挙例している。尤もなことだ。

「通儒討覈謂、僞起哀平。東序秘寶、朱紫亂矣」「通儒討覈謂、僞起哀平」の句の不整について、龍学家に諸説があるが、『楊校』説が当を得ていると思う。謂の字を徒字と解すればおのづから落着するのではなかろうか。また偽書の起の時期についても諸家の諸説がある。『義證』に引く清代の汪繼培の「緯候不始於哀平辨」の詳細な考証は傾耳に値する。「要據其盛行之日而言」が結論である。発起の起では無く、盛行の興起の起だと言うのである。

「至於光武之世、篤信斯術。風化所靡、學者比肩。沛獻集緯以通經、曹褒撰讖以定禮。乖道謬典、亦已甚矣」『後漢書』に方術傳が有り、その序文に方術の発生敷衍の経緯と功罪が説かれている。「而斯道隱遠、玄奥難原、故聖人不語怪神、罕言性命、或開末而抑其端、或曲辭以章其義」とある。沛王劉献や曹褒が讖緯を選集した具体的既述は無いが、図讖や讖記を解説したことが、各伝に記されている。「上好是物、下必有甚者矣」(『禮記』緇衣)で、上、上なれば下これに倣い従うは世の常ということであろう。当然、反対者もまた居る。下述の四者(桓譚・尹敏・張衡・荀悦)がそれである。「四賢博練、論之精矣」と劉勰が書いているように、こちらの側の主張は各人の伝に詳述されている。「此篇之義、引申之、於我國學術所關尤要。蓋我國學術爲陰陽五行之説所害、而陰陽五行之説、必與讖緯相比附。(中略)蓋自此等偽託之説流入羣書、於是哲學科學皆受其害。道家流弊以符籙導引諸説爲事者、固無論矣、即儒家之言災異、實乃教人迷信。而純粋科學、如天文、地理、醫經、算術、所以數千年無大進境者、何莫非此等邪説階之厲邪?今申論之於此、或亦有志所樂聞歟?」と劉永濟の『文心雕龍校釋』(以下『校釋』と略称)にある。道家のそれは論外としても、儒家の災異説が民に迷信を教え、理系の学の進歩を数千年も停滞させたのだ!心ある者なら聞き届けてくれよ、と永濟は激昂しているのである。劉勰の「緯何豫焉」である。

[四]若乃羲農軒皞之源、山瀆鍾律之要、白魚赤烏之符、黄銀紫玉之瑞、事豐奇偉、辭富膏腴。無益經典、而有助文章。是以古夾辭人、捃摭英華。平子恐其迷學、奏令禁絶、仲豫惜其雜眞、未許煨燔。前代配經、故詳論焉。

(乃ノ羲農軒皞ノ源、山瀆鍾律ノ要、白魚赤烏ノ符、黄銀紫玉ノ瑞ノ若キハ、事ハ奇偉ニ豐ニシテ、辭ハ膏腴ニ富メリ。經典ニ益無キモ、而モ文章ニ助ケ有リ。是ヲ以テ古夾ノ辭人ハ、英華ヲ捃摭ス。平子ハ其ノ學ヲ迷ハサンコトヲ恐レテ、禁絶セシメンコトヲ奏シ、仲豫ハ其ノ眞ヲ雜フルヲ惜シミテ、未ダ煨燔ヲ許サズ。前代ヨリ經ニ配セラレシ、故ニ詳ラカニ論ゼリ。)

「若乃羲農軒皞之源、山瀆鍾律之要」「黄注も范注も、この「山瀆」「鍾律」に注して、遁甲開山図や鍾律災応などの書名を挙げてゐるけれども、彦和は、特定の書のみを指したのではなく、山川や音律、つまり地理や音楽といふ大切なことが緯書に書かれてをることを指摘したのである」と斯波は言う。次いでその山川に関する佚文三条と音律に関する佚文三条を引いている。その文の内容を見れば、河図緯で『山海経』の地理説明に似た崑崙山のことが、音楽の方は、樂緯で『礼記』楽記に似た音律のことが説かれている。王達津の「論≪文心雕龍・正緯≫篇写作意義」（『古代文学理論研究論文集』（南開大学出版社）に、宋の顔延之の「三月三日曲水詩序」の「晷緯照應、山瀆效靈」の句と李善注の「效靈如山出器車、瀆出圖書之類」を引き、これは、宋・斉時代の常用の典故である、と言っている。「日と星は明らかに応え、山は器車の川は図書の霊験あり」て天地自然は瑞応すると言うのであろう。善政に自然は瑞兆を以て応える。

「白魚赤烏之符、黄銀紫玉之瑞」「黄注、范注ともに、史記、周本紀の文を引証してゐるけれども、それはいけない。緯書から引証すべきである」と斯波は言う。正しくそれはいけない。斯波の札記が冒頭四篇で終わったのを戸田は慨嘆しているが、筆者も同感である。これが、全篇あれば、龍学に寄与するところ計り知れぬものがあったであろうことを思うと遺憾である。過年、中国での龍学会の折りに、本国の大家がこの札記を読んでいて「斯波先生の札記は緻密周到で素晴らしい。どういうお方ですか？」と訊かれたことがある。「私の先生の先生です」と対えながら、誇らしさを感じたことを想い出す。斯波の深読みを如実に窺える一条がこの条にある。「白魚」と「赤烏」（唐写本は赤雀に作る）、「黄銀」と「紫玉」の文字がそれぞれ一文の中に書かれているのを、二語を並べて（色彩相互を――筆者注）映発させているのに劉勰が意を惹かれた故の下文の「辞富膏腴」で、それでこそこの「辞富膏腴」がよく生きてくる、と斯波は洞察している。鋭い指摘だと言える。実証文が長いので省いたが、是非参看いただきたい一条である。緯書の佚文集などを流覧していると、確かにその色彩語の豊富鮮麗に目を奪われることが多い。

「事豐奇偉、辭富膏腴。無益經典、而有助文章」『義證』に「「膏腴」、指辭采豐富」と。『札記』に後二句を「此言甚諦」と。緯書の真諦を射ているというのであろう。「徐復觀≪文心雕龍漫談≫謂「緯書與文學的關係、即是神話與文學的關係」（見増補五版≪中國文學論集≫）如此理解可以幫助認識劉勰寫≪正緯≫篇之重要意義」と詹鍈は理解を示す。緯書は、物語りの内容的にはドラマ性豊かで、形式面では色彩と音律の美麗溢れる辞に埋め尽くされている。対社会的に直接有効の経書の助けにはなりにくいが、文章表現における美的感覚には資するところ大である、とでも訳せば少しは劉勰の真意に近づけるだろうか。美は直接には虚偽虚構の所産では無いが、そのような危うさをも常に併せ持つことを劉勰は見抜いていたに違いない。であってなお、だからこそなおの文心と≪雕

龍≫なのであったのではなかろうか。所詮、文の学（美的文章表現術）とは、妄想と虚構が美を獲得する一瞬において真実に変貌する人類の一大発明であったのだ、という思いを筆者は未だ消し去り得ない。美は虚構であるときにこそ、その輝きをいや増すこともあるのかもしれない。神話はまた文学と同じく人類の英知と想像力の所産でもあった。

「是以古來辭人、捃摭英華」饒宗頤等『文心雕龍集釋稿』に「案辭人指漢以下辭賦家」と。

「平子恐其迷學、奏令禁絶、仲豫惜其雜眞、未許煨燔。前代配經、故詳論焉」緯書に対して、張衡は学問を迷惑させる故の廃棄を、荀悦はそこに真理もまた存する故の非焼却を主張したが、在来、経典と並挙されて来た緯書であれば、無下に打ち棄てるのも惜しいので、ここにそれを詳論したと。「「迷學」とは、人をして学問に於て迷はせる、つまり間違った説を妄信させる、といふ意味である」と斯波は懇切である。「彦和生於齊世、其時讖緯雖遭宋武之禁、尚未盡衰、士大夫必猶有講習者、故列舉四偽、以藥迷罔。蓋立言必徵於聖、製式必稟乎經、爲彦和論文之本旨。緯候不根之説、踳駁經義者、皆所不取」と范文瀾の注にある。前代、宋の武帝による讖緯の禁止令が出たにも関わらず、なお全て盡衰にまでは至らなかった。だから劉勰は、四偽を列挙してその迷妄連中を薬治せんとし、讖緯の無根拠性、経書を紛乱するものは総じて採取しなかった。

贊曰　　榮河温洛、是孕圖緯。神寶藏用、理隱文貴。世歷二漢、朱紫騰沸。芟夷譎詭、採其雕蔚（贊ニ曰ク、榮河温洛、是ニ圖緯ヲ孕ム。神寶用ヲ藏シ、理隱レ文貴シ。世二漢ヲ歷、朱紫騰沸ス。譎詭ヲ芟夷シ、其ノ雕蔚ヲ採レ）

「榮河温洛　是孕圖緯」黄河の輝きと洛水の温みは、讖緯河図を孕産する兆。

「神寶藏用　理隱文貴」緯書の神秘的効用に加えて、論理面の晦渋と修辞面の貴重。

「世歷二漢　朱紫騰沸」両漢二代に真と贋は雑糅続発す。

「芟夷譎詭、採其雕蔚」奇怪なるは斥けて、美辞麗句をば採り入れん。

古代の聖天子の盛徳が、自然を感応させて図録・讖緯を産出する前兆を孕む。その所産は効用深く、晦渋なれども、修辞には貴重。

李曰剛『文心雕龍斠詮』直解書き下し文

正緯篇第四（一二九頁～一五二頁）

壹（一二九頁）

夫れ神明の道理は以て幽昧を闡明するを得て、天定の命數は焉に於て微妙を顯現す。相ひ傳ふ、龍馬は圖を負ひて黄河より出で、伏犧は之に法りて以て八卦を畫し、而して易象は興作す。神龜は書を背にして洛水に見はれ、夏禹之に法りて以て九疇を成し、而して洪範は輝耀す、と。所以に易經の繫

辭上に云ふ「黄河は龍圖を出現し、洛水は龜書を出現して、聖人は其の法象を取效して而して八卦九疇を作る」と。此れ即ち圖緯の説の由來なり。祀だ世代の久遠に因りて河圖洛書の文字は已に隱没して明らかならざるのみならず、災異を好言するの儒生は往往にして天命に矯托し、荒誕不稽の文辭を造作す。先賢は之を以て經義を輔證する緯書を保存すと雖も、然れども後世の僞托の符録も亦た經名に憑依して滋蔓す。

貳（一三二頁～一三三頁）

夫れ六經は文采煥發して、而して七經緯と尚書中候とは稠密にして重疊、孝經・論語は義理昭明にして、而して鉤命訣と論語八讖とは紛亂して雜陳す。經典を考按して以て讖緯を檢驗するに、其の後儒の僞托と爲す者は凡そ四證有るを知る。良に緯讖の經典に於けるを以ては、殆ど猶ほ織作時に推往引夾するの機、綜然として必須ず絲麻の縱横に交錯し條有りて紊れずして乃ち布帛を製成するがごとし。如今、經典は雅正にして而して緯讖は詭奇にして、違背牴牾して相ひ去ること千里なり。此れ其の僞託と爲すと見る可き者の一なり。經典は聖哲の彝訓を顯示し、緯讖は神明の教理を隱臧す。聖哲の彝訓は廣博に宜しくして、神明の教理は簡約に宜しくして、而して讖緯は多く經典に出て啻だに倍蓰するのみならず、述ぶる所の神明の教理は更に異常繁雜なり。此れ其の僞託と見る可き者の二なり。凡そ天意神旨を受持するの圖文は始めて符命讖記に配稱されて、而して河圖九篇、洛書六篇及び其の增演の三十篇と七經の緯三十六篇等は合して八十一篇と爲し、均しく孔子の作る所に假託すれば。則ち所謂唐堯は緑圖を創造し、周の文王は丹書を制作すると。寧ろ矛盾するに非ざるか。此れ其の僞託と見る可き者の三なり。

殷・商・周の文武の前に存りて、天神策命の圖讖・符籙は已に迭ひに出現する有り。而るに聖哲の經典は春秋の末年に至りて方始めて完備す。是くの如く緯書已に經書に先んずれば、本體上に存りては已に經緯の次序に合はず。此れ其の僞託と爲すと見る可き者の四なり。僞の緯書は既に經典と違背牴牾すれば則ち其の義理の同じからざるは自然に明曉す。經典は已に訓を萬世に垂るるに足る。緯書又た何ぞ此に干預するを庸ひんや。

參（一三八頁～一三九頁）

夫の圖讖符籙の顯現を推原するに、乃ち上蒼の美善の旨意なり。其の事迹は所以に聖王に瑞應すれども、而も其の義理は則ち經典に配合するに非ず。是を以て黄河は復た龍馬の負圖を出現せず。孔子は即ち世衰へ道微くして此の祥瑞を見るを得難きを歎息慨傷する所有り。若し果して河圖が人の製造に由る可くんば、孔子の感喟を煩勞するを庸いること無からん。往昔、周の康王の位に既きし時、河圖は王宮の明堂の東廂に陳放せらる。是れ前世の人君の受命の符瑞と知りて、歴代に皆な珍貴として流傳す。孔子の撰述する所の十翼は、但だ易卦を闡敍するの記録なるのみ。是に於て方技術數の士は、

即ち怪誕の方述を以て六經に附曾し、或ひは歴象五行を論説し、或ひは災殃異變を敍述す。左氏の襄公の三十年の傳に記す所の鳥鳴き嘻嘻たるの聲は恍として人言に似たりとは、上蒼の將に災を宋に降さんとして即ち宋の伯姫卒するの警語と爲す。漢書の五行志に記す昭帝の時に上林苑の柳葉の蟲齒に由りて略ぼ「公孫、病已立つ」の字形に似るは即ち以て宣帝の即位の徵兆と爲すが如く有り。其の他の各篇の此に類するの條目は、日び益ます滋衍蕪蔓して、皆な必ず假託して孔子の著述と爲す。

博洽多聞の大儒の研討考覈の結果に據れば、多くは讖緯の僞説と謂ふ。哀平二帝の時代より起りて、此の周の康王の時に、王宮の東廂に陳放せられし秘圖寶籙從り、即ち紫の朱を奪ひて眞僞は紊亂す。

後漢の光武帝劉秀の時代に迨(およ)び、深く圖讖符籙の術を信ず。政令教化の影響に由りて朝野風靡し、俗儒淺學は迎合の潮流を爲す。轉た相ひ趨赴し比比として皆な是なり。甚だしきに至りては五經を講解するも亦た讖律を以て本と爲す。

沛獻王の劉輔は即ち圖讖を蒐集して以て經書に疏通し、侍中の曹褒は章帝の命を受けて禮を制するも亦た五經讖記を雜入して、婚喪吉凶の禮制を撰定す。此くの如く正道に違背して經典を歪曲することもま亦た未だ過の甚だしきを免れず。此れに由りて桓譚は其の虚造僞託の人主を欺惑するを疾惡し、尹敏は其の浮夸假冒の後生を疑誤するを抵戲す。張衡は其の邪僻慌謬の典籍を玷汚するを掲發し、荀悦は其の詭詐誕妄の尼聖を厚誣するを辨明す。此の四賢者は皆な學問は淵博に、治事は練達にして、其の讖緯の評論に於て精闢と謂ふ可し。

肆（一四六頁）

夫の伏羲・神農・軒轅・少皞の四皇の原始の圖緯・山岳・川瀆・鍾鼓・律呂の四事の重要の讖籙より以て周の武王の河を渡るに白魚舟に入り赤烏屋より流るるの符命有り、王政は象平にして黄銀紫玉の深山より見はるるの瑞應有るに及ぶが若きは、其の事義は豐盛にして而して徵象は奇偉に、其の文辭は繁富にして内容は潤澤なり。經典に若何なる裨益無きと雖も而も後世の文人は引用に習ひて詞章に對しても亦た頗る資助有り。所以に古自り以來の墨客騒人は、其の内容の精粹にして而も辭藻の華美なる者を蒐集して而して之を採擷す。張衡は惟だ其の後進の學者を迷惑するを恐れて一體の禁絶を奏請す。荀悦は其の雜りて聖賢の眞義有るを顧惜して、未だ混同して燒燬するを許さず。要するに緯讖圖籙の前代に在りては間ま經典と配輔する所有りて未だ一概には抹殺す可からず。特に詳らかに論を加へ此に正すことを爲せり。

伍（一五二頁）

贊詞に曰ふ

河は榮光を發ち洛は温氣に塞がれ　龍圖龜書は是れ靈瑞を孕む

神祇寶物は大用藏備し　天理は隱晦なるも文辭は貴ぶ可

し

世は二漢を歴て本を變ふること厲しきを加へ　紫の朱を奪ふを以て喧騰鼎沸す

稂莠を刈除して譎詭は謂はれ無く　菁華を採擇すれば文蔚に補ひ有り

『文心雕龍』試訳

正緯第四

この世の幽玄なるものを事理、事物の明晰へと変化させる原動力を持つ神秘なる存在、それが、神道と天命である。事理化が黄河より出現の馬龍の易となり、事物化が洛水より出現の神亀の書であった。易の繫辞伝の「黄河は図を出し、洛水は書を出し、聖人がこれを事理・事物化したのが、易と書だった」とはそのことである。とは言うものの、時代の遠隔ゆえに、記述も不鮮明で、非合理の生じるのも当然のことである。だから真実もあるが、虚偽も混在するのはやむを得ない。

六経は輝かしく紛れもないが、付随の緯書は輻輳錯雑している。孝経・論語は明晰そのものだが、仮託の讖緯は複雑多岐である。経書の観点から緯書を検証すれば、怪しい所が、四点もある。緯書と経書は、丁度、織物の横糸と縦糸の関係。縺れが無くてこそ、立派な一幅の布となる。ところが、経書は一糸乱れぬ雅正なのに、緯書の方は乱雑で奇怪極まりない。その差違は歴然である。これが緯書の怪しい（捏造の）第一点である。経書は聖人の正しい教えに満ちているが、緯書の方は、神秘不可思議の教えがいっぱい。聖人の教訓は明正ゆえの広大に対して、緯書の教えは隠晦ゆえの簡約が相応しいのに、緯書は夥多で、簡約を命とする神秘の託宣は煩雑そのものである。これが緯書の怪しい（捏造の）第二点である。天から降されたものだからこそ、符讖（めでたきしるし）である筈なのに、事実は、讖緯書八十一篇全てを孔子の作に仮託している。これらの緯書の記載より見れば、堯が緑図を作り、周の文王が丹書を作ったなど、どうして言えよう。これが緯書の怪しい（捏造の）第三点である。殷・周代以前には緯書が頻りに現われたが、春秋の末になり、諸経書が完備した。縦糸が先で横糸は後というのは、機織りの順序にも悖ることになる。これが緯書の怪しい（捏造の）第四点である。このように緯書の捏造がはっきりした以上、意味内容が怪しいのは言うにも及ばない。教えは経典にこそ相応しいので、いまさら緯書の出る幕でもない。

河図緑書の出来を究めれば、それこそ大いなる天の美しい託宣であり、その出現は聖王に瑞応したもので、内容は経書に沿うたものではない。だからこそ孔子は、黄河から図が現われぬのを已んぬるかな、と慨嘆したのだ。もし偽造がきくものならば、慨嘆は不要のことだ。往昔、周の康王は、河図を宮殿の東壁に安置した。これからすれば、前代の緑図は代々秘宝として伝えられたことは明瞭である。孔子が書いたのは、

それらの解説だけであった。さて後の方術家らは、奇怪な方術や暦象五行や災殃異変をもっともらしく六経に仮託付会した。鳥の鳴き声を人語にしたり、虫の葉喰いの紋を文章に見立てたり、でたらめの数々を全て孔子に偽託した。良識ある学者たちの考証によれば、このようなでたらめは漢の哀帝・平帝の世に隆盛したとのこと。例の康王の宮殿に陳列された河図などの秘宝も、これらと入り乱れて真贋区別のつかぬありさまとなった。後漢の光武帝のころになると、帝は方術に痛く執心され、「上、上なれば、下これに倣う」の伝で、民はおろか変な学者までも目白押しの体たらく。讖緯を経書とむやみやたらに関係づけた沛献王の劉輔と侍中の曹褒は、正道に違背し経典を歪曲すること誠に甚だしいものがある。だからこそ、桓譚はその偽りを憎み、尹敏はそのうすっぺらを冷やかし、張衡は偏りを暴き、荀悦はうそっぱちを見極めた。この四人の博学練達の士は、完膚無きまで論証をし尽くした。伏羲・神農・軒轅・少皞の起源由来、地理・音楽に関する緯書の重要箇所、周の武王の天下統一を予兆する白魚・赤烏の逸話、天下泰平なら黄金の紫玉が深山に出土するという瑞兆。これらは、珍しい話に満ちていて、言葉の感覚も色彩美溢れ至って濃やか。雅正の経典には裨益なしだが、華麗な文章制作には強い味方となる。だから、後世の文人たちは、これらを巧みに自己の創作に生かしている。張衡は、緯書が正学を惑わすことを懸念して、その廃棄を上奏したが、荀悦は、緯書焼却説に対し、そこには真もまた混在していると主張して焼却には反対した。緯書はかねてより経書と並び称されているので、その再評価を精論した次第である。

要説すれば
黄河輝き、洛水温めば、これぞ図讖を孕む佳き予兆
神秘の力は効有りて、道理は晦渋なれど、彩色は匂い立つ
両漢のあわいに、真贋混在するに
奇怪は切り捨て、香華だけを我がものに

辨騷第五

騒は「離騒」を指すが、それは『楚辞』の総称であって、離騒一篇のみでないこと、諸家の説くごとくである。劉勰は緯書と同格で捉えている。「蓋文心之作也、本於道、師於聖、體於經、酌於緯、變於騒。文之樞紐、亦云極矣」と序志篇にあるように、この冒頭五篇は文章表現の核心論だが、冒頭三篇の本・師・体に比べて続く二篇の酌・変は同格では無いように取れる。それはあくまで斟酌と変化のそれであって本原・師徴・体宗の根源論とは異なる。部分的肯定であり承認である。通変篇の質文・雅俗の語を借りて言えば、冒頭の三篇が雅・質に重きを置くに対して、後続の二篇は文・俗に重きを置くと考えても大過ないであろう。文章表現が閉塞停滞に陥るとき、それを斬新に変革する力（エネルギー）と鍵を

握るのが緯書であり楚辞である、と劉勰は考えての配篇構成であろう。四節に「酌奇而不失其眞、翫華而不墜其實、則顧盼可以驅辭力、欬唾可以窮文致」とある。この奇・華が通変篇の文・俗であり、真・実が通変篇の質・雅である。『詩経』の真実に対して『楚辞』の奇・華。この巧みな融合が辞力を駆使し、文致を窮極できるのである。奇文（一節の「奇文鬱起」）・奇辞・奇采と華辞・華采が変革の鍵を握るのである。従来、本篇が、先掲の序志篇に言う文の枢紐論に入るのか、次篇の明詩篇以下の文体論に入るのかの議論が喧しい。筆者は無用の争論だと考える。弁騒篇は、枢紐論だと劉勰は明言しているし、賦体については、詮賦篇が明詩篇の次にあるのだから、重ねて論じることはないはずだ。明詩篇以下は「釈名章義」によって各篇が構成されているのに対し、弁騒篇にそれは無いことからも、無用の論争である。また「離騒」は『楚辞』の総称ではないとか、「風」「雅」は、『詩経』と書くべきだとか、瑣末な不要の議論が多すぎる。下文の三節の冒頭に劉勰は確言している「將覈其論、必徵言焉」と。それを筆者は「評価の論証の精審確実さを求めようとするなら、原典を愚直に熟読玩味するのが一番だ」と意訳した。見当外れを言う議論者の病根は、原典を愚直に熟読していない所にあるように考えられる故の意訳であった。少しは眼を見開き、耳も傾けていただきたい。「然則此篇之作、實有正本清源之功。其於翼聖尊經之旨、仍成一貫、而與〈明詩〉以下各篇、立意迥異」と『校釋』にある。本篇の制作には、まこと楚辞も本源であることを明正にした功績がある。聖人を翼賛し、経書を尊崇する精神においても、仍お（前二篇と）一貫していると。楚辞も宗経に沿った上での創作上の新境地の開拓だ、と言えるだろうか。正に離騒経である。

［一］自風雅寢聲、莫或抽緒。奇文鬱起、其離騒哉。固已軒翥詩人之後、奮飛辭家之前。豈去聖之末遠、而楚人之多才乎（風雅聲ヲ寢メリ自リ、緒ヲ抽クモノ或ル莫シ。奇文鬱トシテ起ルハ、其レ離騒ナルカナ。固ヨリ已ニ詩人ノ後ニ軒翥シ、辭家ノ前ニ奮飛ス。豈ニ聖ヲ去ルノ末ダ遠カラズシテ、楚人ノ多才ナルカ）

「自風雅寢聲、莫或抽緒、奇文鬱起、其離騒哉」風雅が正統的雅・質備わる詩経なら、離騒は文・俗に秀でた非正統の奇文であろう。しかしそれは前代の詩経を襲い抽きつつも、後に続く漢代の壮大な美辞麗句の辞賦発生の引き金にもなった。「抽緒」を李曰剛は「謂収拾餘緒」と解し、詹鍈は「謂収引餘緒」と解している。「引き継ぐべき仕事を引き継ぐ」という日本語のニウアンスが近いだろうか。

「固已軒翥詩人之後、奮飛辭家之前」前代と後代の仲介役を立派に果たした、と言うのである。承上啓下の役割である。

「豈去聖之末遠、而楚人之多才乎」時代を画する程の名作出現の因を二点から解明した。

〔二〕昔漢武愛騷、而淮南作傳。以爲國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂。若離騷者、可謂兼之。蟬蛻穢濁之中、浮游塵埃之外、皭然涅而不緇、雖與日月争光可也。班固以爲露才揚己、忿懟沈江。羿澆二姚、與左氏不合、崑崙懸圃、非經義所載。然其文辭麗雅、爲詞賦之宗。雖非明哲、可謂妙才。王逸以爲詩人提耳、屈原婉順。離騷之文、依經立義。駟虬乘翳、則時乘六龍。崑崙流沙、則禹貢敷土。名儒辭賦、莫不擬其儀表。所謂金相玉質、百世無匹者也。及漢宣、嗟歎以爲皆合經術。揚雄諷味、亦言體同詩雅。四家舉以方經、而孟堅謂不合傳。褒泛任聲、抑揚過實。可謂鑒而弗精、翫而未覈者也（昔漢武騷ヲ愛シテ、淮南傳ヲ作ル。以爲ヘラク、國風ハ色ヲ好メドモ淫セズ、小雅ハ怨誹スレドモ亂レズ。離騷ノ若キ者ハ、之ヲ兼ヌト謂フ可シ。穢濁ノ中ヨリ蟬蛻シテ、塵埃ノ外ニ浮游シ、皭然トシテ涅スレドモ緇セズ、日月ト光ヲ争フト雖モ可ナリ、ト。班固ハ以爲ヘラク、才ヲ露シ己ヲ揚ゲ、忿懟シテ江ニ沈ム。羿澆二姚ハ、左氏ト合セズ、崑崙懸圃ハ、經義ノ載スル所ニ非ズ。然レドモ其ノ文辭ハ麗雅ニシテ、詞賦ノ宗タリ。明哲ニ非ズト雖モ、妙才ト謂フ可シ、ト。王逸ハ以爲ヘラク、詩人ハ提耳シ、屈原ハ婉順ス。離騷ノ文ハ、經ニ依リテ義ヲ立ツ。虬ヲ駟ニシテ翳ニ乘ルトハ、則チ時ニ六龍ニ乘ルナリ。崑崙流沙トハ、則チ禹貢ノ土ヲ敷クナリ。名儒ノ辭賦、其ノ義表ニ擬セザルハ莫シ。所謂金相玉質、百世ニ匹無キ者ナリ、ト。漢宣ニ及ビ、嗟歎シテ以爲ヘラク、皆經術ニ合ス、ト。揚雄ハ諷味シテ、亦タ體ハ詩ノ雅ニ同ジト言フ。四家ハ擧ゲテ以テ經ニ方ブルニ、孟堅ノミハ傳ニ合セズト謂フ。褒泛ハ聲ニ任セ、抑揚ハ實ニ過グ。鑒ミテ精シカラズ、翫ヒテ未ダ覈カナラザル者ト謂フ可キナリ）

「昔漢武愛騷、而淮南作傳。以爲國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂。若離騷者、可謂兼之。蟬蛻穢濁之中、浮游塵埃之、然涅而不緇、雖與日月争光可也。」傳（傳の字を傳に変え賦と通じさせてその大旨を賦体にまとめたのであろう、という王念孫の見解もある。『讀書雑志』漢書離騷傳の條）の字の意味が従来問題になった。朝食前に書き上げられうるという量の問題に帰着して、普通の意味の訓詁・注釈ではなくて、大意を記述したものであったろう、というのが落ち着き所である。以爲以下は淮南王劉安の「離騷」評である。節度ある詩経の風と雅の優点を兼備しているのが「離騷」である、と。「蟬蛻」以下は、孤高廉潔な屈原の人格への讃辞。国風と小雅と楚辞は、『詩品』では、後世の詩人の三大淵源である。

「班固以爲露才揚己、忿懟沈江。羿澆二姚、與左氏不合。崑崙懸圃、非經義所載。然其文辭麗雅、爲詞賦之宗。雖非明哲、可謂妙才」屈原の人格と作品の二面からの追及である。才能を掲露し自己を顕揚した故の入水憤死。離騷の内容は経書とそぐわないものもあるが、その形式は美麗典雅で詞賦の

開創者（「「宗」、祖、指開創者」と詹鍈）と言えると。つまりは、明哲保身の処世の術には罔かったが、表現者としては一流だったと。

「王逸以爲詩人提耳、屈原婉順。離騒之文、依經立義。駟虬乘翳、則時乘六龍。崑崙流沙、則禹貢敷土。名儒辭賦。莫不擬其儀表。所謂金相玉質、百世無匹者也」班固の毀誉褒貶に対して王逸以下の三者（二者は後出）は、讃美的である。「所謂金相玉質、百世無匹者也」も過褒とは言えないだろう。「金相玉質」の典拠は、詩経の「金玉其相」だろうが、これはその金玉の如き堅美の資質が、文章にも反映する故に、後世は主として内実外華兼備の文学評語に使われて行く。ここでもその両方を兼ねた褒め言葉に取った方がいいだろう。

「及漢宣、嗟歎以爲皆相經術」嗟歎は感嘆ではなく、吟誦の意だと『斠詮』にある。宣帝は、班固とは逆に経術に整合していると。

「揚雄諷味、亦言體同詩雅」諷味を諷誦玩味と訳すのは目加田と戸田。諷誦は朗吟、玩味は味わい尽くす（興膳は「味読」と訳している）。劉勰の時代の語であることが諸家の出典から判る。典拠の用例文から窺えるのは、諷誦はリズム面からの讃美を籠めたい時の常套語だということである。体は詩経の雅体に同じ、というのは、国風の俗に対して二雅の雅正を言いたいか？典雅にして正世の意も含意暗示したかったのであろう。

「四家擧以方經、而孟堅謂不合傳。褒泛任聲、抑揚過實。可謂鑒而弗精、翫而未覈者也」「覈」實。全句意謂玩味而未核實」「以上爲第二段、辨別漢代各家對≪離騒≫的評價、認爲都有失於偏頗」と『義證』にある。不均衡な評語であると。劉勰の批評方法論は内容・形式両面からの精審な考察である。彼が『文心雕龍』を著した目的も近代の評論が照隅（単眼一視点）であって観衢（複眼多視点）で無い偏頗に対する批判に始まることは、序志篇に詳しい。ここでもそのことを指摘しているのである。いい加減なその場凌ぎの粗雑さへの厳しい批判である。彼は批評の公平を期さんが為に、その場の論題に関する無数の古典を縦横に引用する。

一九八四年に上海の復旦大学の主催で開かれた「『文心雕龍』国際研討会」で、香港の中文大学の饒宗頤教授は、「『文心雕龍』は、古典のオンパレードだ」と言われた。正にその観無きにしもあらず、だと筆者も一応同意する。しかし、筆者は拙稿（一）の掉尾に「小西甚一は博学と強記によって偉著『日本文藝史』に雅俗の際を槃括する熱情を奮っている。彼にあっては文質の斟酌も雅俗の槃括と統合されていて、その壮大無比の力業は読者を圧倒する。時代を画するほどのいかなる著作もその要諦は一語に尽きる。否、一語の敷衍説解だと言ったほうが適切かもしれない。（中略）小西の要諦の一語はもちろん「雅と俗」である。「シナの文芸理念としていちばん基本的なのは、二千年あまりを通じてほとんど変わらなかった古典主義であろう。……「この完全は過去に在り」とする態度は、文芸では「先例ある表現こそ美しい」という意

識になり、そのため、制作者は莫大な量の用例を記憶する必要があったし、また、作主と同じぐらい用例を知る者にだけ適切な享受が可能であった」（『日本文藝史』）Ⅰ五九頁）ここに吉川幸次郎の語として引用する「先例のある表現こそ美しい」というのが小西の説く雅である」と書いた。彼らはただ単に古典を引き捲り、博識を披露している訳ではない。古典（先例）と在世時の作品の表現の微妙な変化差異に美の極致を捉え見ているのである。少なくとも東洋の中国や日本の文学を鑑賞するに当たってこの一点を理解していなければ、読解の味わいの享受の過半は消えてしまうだろう。微妙な変化差異の美を味わい尽くすためには、先例を知らねば手の打ちようがない。徒手空拳では、闘いようが無い。かるがゆえの、古典知識である。先に引かれた四家の離騒評は、詹鍈が指摘する如く、確かに偏頗である。劉勰の古典の多引は、その偏頗を逃れ公平なバランス感覚を保持せんがための彼なりの批評方法であったに違いない。本書全篇に横溢する彼の折衷論もまた、偏頗から少しでも遠離る為におのずから編み出された方法論であったのだろう。蛇足だが、折衷とは、固定膠着的な比較対照からの判断審判ではなく、流動揚棄的弁証法でなければならないことは、言うまでもない。

これより以下、劉勰は離騒の言辞に徴して公平な批評を実際に披瀝している。書き上げられたものを現代の知識から読めば、おおむね妥当の見解だと首肯できるが、多くの作品を読み解いて後に、このようにきちんと多角的見地から整理することは、実際、容易な業ではない。『楚辞』の数多の語群から、その場その場に的確な一語を採り来て四六の句に組み込むのは至難のことを知っている分だけ、劉勰の駢儷文の内容と形式の殆ど完璧に近いその整合の表現力に今更ながら驚嘆歓喜する。内容・形式が融合一体化して見事な美的世界を創出している。『文心雕龍』を読みながら、その内容の斬新的確にしばし恍惚となる時があるが、それがまた駢文という究極の文章美と相い俟って幻想の世界を見せる時、文学というものに陶酔している自分を発見する。泉鏡花の作品を読んでいるような感覚をしばしば味わう。内容と形式が融合一体化するなどと、気障な言い方をしたが、日本語の文章では、そういう体験がついぞ無い。しかし、駢文を少し読み慣れて来たころ、そういう感覚が、ふうっと解るような気がした。文章の形式とは、駢文のようなものを指す時にこそ（だけ）使われてよい言葉だ、とその時に思った。台湾の張仁青は、駢文を自作もする碩学だが、彼は駢文について次のようなことを言っている「要而言之、此種旖旎風華之美術文学（belles-lettres）、不但在文學表達之技術上出神入化、亦且将中國文學的形・音・義三者之美發揮無遺、是最足以表現中國文學之特色、其崇高地位與永恒價値、非世界任何國之文學所能相提並論、去此則中國文學将減價不少矣」（七〇～七一頁）（『魏晉南北朝文學思想史』文史哲出版社）と。盛んなる風のそよぎ、華の綻びのような美文学。それは表現技術において、既に入神の域に達しているだけでなく、中国文学の形・音・義の総

合的美文学として余す所なき中国文学の一大特色である。世界に比類ないベレッツラの窮極の駢儷文。これが無ければ中国文学の価値は大減するとまで考えている。その駢文の大成者が劉勰であった。劉勰の文章から味わう感覚に近いものを張仁青の書く諸文章や黄侃の『札記』や劉永濟の『校釋』からも、しばしば味わわせてもらっている。これは、何にも換え難い至福の刻である。過年、李曰剛の『斠詮』を通読した際に附録六の文心雕龍板本考略の中に明の張之象の次のような序文があった。少し長くなるが、引いて一服の清涼剤としていただこう。

「文心雕龍十卷四十九篇、合篇終序志一篇爲五十篇、梁通事舍人劉勰彦和所著也（中略）今覽其書、採摭百氏、經緯六合、遡維初之道、闡大聖之德、振發幽微、培析淵奥。及所論撰、則又操舍出入、抑揚頓挫、語雖合璧、而意若貫珠、綱舉目張、枝分派別、假譬取象、變化不窮。至其揚搉古今、品藻得失、持獨斷以定羣囂、證往哲以覺來彦。蓋作者之章程、藝林之準的也、自非博極羣書、妙達玄理、頓悟精詣、天解神授、其孰能與於此耶！如在仲尼之門、較以文學、必當與游・夏同科矣。或謂六朝齊・梁以下、佛學昌熾、而文多綺麗、氣甚衰靡、執以議勰、不亦繆乎？嗚呼！道貴自信、豈必求知。世無文殊、誰能見賞。阮光録思曠有云『非但能言人之不可得、正索解人亦不可得』是以牙生輟絃於鍾子、匠石廢斤於郢人、作之難、知之難也（後略）」時の文壇の大御所沈約から「深得文理」と賞讃された『文心雕龍』の精髄鵠的を射抜いている内実外華兼備の名文と言えるのではないだろうか？　まこと「蓋作者之章程、藝林之準的也、自非博極羣書、妙達玄理、頓悟精詣、天解神授、其孰能與此耶！」である。

［三］將覈其論、必徵言焉。故其陳堯舜之耿介、稱湯禹之祗敬、典誥之體也。譏桀紂之猖披、傷羿澆之顚隕、規諷之旨也。虬龍以喻君子、雲蜺以譬讒邪、比興之義也。每一顧而掩涕、歎君門之九重、忠怨之辭也。觀茲四事、同於風雅者也。至於託雲龍説迂怪、豐隆求宓妃、鴆鳥媒娀女、詭異之辭也。康回傾地、夷羿斃日、木夫九首、土伯三目、譎怪之談也。依彭咸之遺則、從子胥以自適、狷狹之志也。士女雜坐、亂而不分、指以爲樂、娛酒不廢、沉湎日夜、擧以爲懽、荒淫之意也。摘此四事、異乎經典者也。故論其典誥則如彼、語其夸誕則如此。固知楚辭者、體憲於三代、而風雜於戰國、乃雅頌之博徒、而詞賦之英傑也。觀其骨鯁所樹、肌膚所附、雖取鎔經意、亦自鑄偉辭。故騷經九章、朗麗以哀志、九歌九辯、綺靡以傷情、遠游天問、瓌詭而惠巧、招魂大招、耀豔而深華、卜居標放言之致、漁父寄獨往之才。故能氣往轢古、辭來切今、驚采絶豔、難與并能矣（將ニ其ノ論ヲ覈カニセントスレバ、必ズ言ニ徵ス。故ニ其ノ堯舜ノ耿介ナルヲ陳ベ、湯禹ノ祗敬スルヲ稱スルハ、典誥ノ體ナリ。桀紂ノ猖披ナルヲ譏リ、羿澆ノ顚隕セルヲ傷ムハ、規諷ノ旨ナリ。虬龍以テ君子ニ喻ヘ、雲蜺以

テ讒邪ニ譬フルハ、比興ノ義ナリ。一顧スル毎ニ涕ヲ掩ヒ、君門ノ九重ナルヲ歎ズルハ、忠怨ノ辭ナリ。茲ノ四事ヲ觀レバ、風雅ニ同ジキ者ナリ。雲龍ニ託シテ迂怪ヲ説キ、豐隆ヲシテ宓妃ヲ求メシメ、鴆鳥ヲシテ娀女ニ媒セシムトイフニ至リテハ、詭異ノ辭ナリ。康回ノ地ヲ傾ケ、夷羿ノ日ヲ斃シ、木夫ノ九首アリ、土伯ノ三目アルハ、譎怪ノ談ナリ。彭咸ノ遺則ニ依リ、子胥ニ從ヒテ以テ自適セントイフハ、狷狹ノ志ナリ。士女雜リ坐シ、亂レテ分レザルヲ、指シテ以テ樂シミト爲シ、酒ヲ娛シンデ廢メズ、日夜ニ沉湎スルヲ、擧ゲテ以テ懽ト爲スハ、荒淫ノ意ナリ。此ノ四事ヲ摘レバ、經典ニ異ナル者ナリ。故ニ其ノ典誥ヲ論ズレバ則チ彼ノ如ク、其ノ夸誕ヲ語レバ則チ此クノ如シ。固ニ楚辭ハ、體ハ三代ニ憲ルモ、而モ風ハ戰國ヲ雜フルニ、乃チ雅頌ノ博徒ナルモ、而モ詞賦ノ英傑ナルヲ知ルナリ。其ノ骨鯁ノ樹ツ所、肌膚ノ附ス所ヲ觀ルニ、經意ヲ取鎔スト雖モ、亦タ自カラ偉辭ヲ鑄ル。故ニ騷經・九章ハ、朗麗ニシテ以テ志ヲ哀マシテ、九歌・九辯ハ、綺靡ニシテ以テ情ヲ傷マシメ、遠游・天問ハ、瓌詭ニシテ而シテ惠巧ニ、招魂・大招ハ、耀豔ニシテ而シテ深華ニ、卜居ハ放言ノ致ヲ標シ、漁父ハ獨往ノオヲ寄ス。故ニ能ク氣ハ往キテ古ヲ轢ギ、辭ハ來リテ今ヲ切ル、驚采ト絶豔ハ、與ニ并ビニ能クシ難シ）

楚辭が経典と同異する各四点を具体的に指摘して「故論其典誥則如彼、語其夸誕則如此。固知楚辭者、體憲於三代、而風雅於戰國、乃雅頌之博徒、而詞賦之英傑也。觀其骨鯁所樹、肌膚所附、雖取鎔經意、亦自鑄偉辭」とその時代史的位置役割と独自性を説いている。内容的には経典の雅正を取り込み、形式的には楚辭独自の修辞の美を創出している、と。

また内実外華の面から諸篇を分析批評して「故能氣往轢古、辭來切今、驚采絶豔、難與并能矣」と結論し、その優秀性を讃美している。気力は古代をも凌ぐほどで、文辞は現代を切り取り、その艶彩溢れる修辞は圧倒的で、後続の諸作品も匹敵し得ないほどである、と。

「將覈其論、必徵言焉」「求証于言論、以其言驗証」と『語釋』にある。『文心雕龍』の各篇の批評論理の展開方法は、殆どこのやり方でなされている。具体的に過去の実作を採り挙げて、自己の論の裏打ちをするという方法である。

「故其陳堯舜雪耿介、稱湯禹之祗敬、典誥之體也」古聖君の光明正大・畏天敬賢への称賛は『書経』の二典五語の如き体制（風格）があると。

「譏桀紂之猖披、傷羿澆之顛隕、規諷之旨也」「猖披、猶今言行爲不檢」と詹鍈。「猖披、衣不帶之貌、……衣不及帶、浴涉邪徑」と王逸の注にある。着つけの締まりの無さ、しどけなさが、言行のだらしなさに通じて行くのであろう。「猖披、亂也」と五臣の劉良注。李曰剛は「猖狂妄亂」と訳している。顛隕は離騒の「厥首用夫顛隕」から。首が転倒隕墜すること。

「虬龍以喩君子、雲蜺以譬讒邪、比興之義也」博物を人物に比喩する例は多い。

「毎一顧而掩涕、歎君門之九重、忠怨之辭也」君側の奸佞が、公と我の間を隔てることへの忠誠からの怨みである。

「觀茲四事、同於風雅者也」范文瀾は、典誥の体は詩経に無いから、ここの風雅は書（尚書）詩（毛詩）に改めた方がいいと言う。斯波は『文心雕龍范注補正』に、范注に同意しつつも、此の風雅と彼の典誥とを互文と考えればその必要は無いと。張立齋は『注訂』に風雅は概論として言っているのであって、離騒も詩経の別裁（体）だからこのままでいいと。王忠林は『文心雕龍析論』に下文の「取鎔經意」はこの経典と同じの四事を、「自鑄偉辭」は経典と異なる四事を指すと考えている（七七頁）。

「至於託雲龍説迂怪」雲龍の二字は「駕八龍之婉婉兮、載雲旗之委蛇」の合成か？と詹鍈。それにしてもこの一句は収まりの悪い句である。至於の徒字を除けば、いちおう三字の対偶になるが、四六体から見ればそれも不自然である。しかし三字の対偶の句が全く無いという訳でもない。拙稿の「『文心雕龍』の〈情・采〉儷辞抄録」を流覧すれば、徵聖篇に「情欲信、文以言」（孔子褒美子産之語）、封禪篇に「事覈、理挙、華不足、実有余」（張純の「封禪文」への評語）また練字篇には三字、五字、七字句の対偶がある。ならば、ここも三字の対句に見立てても好いのではなかろうか？　戸田は本篇の余説に「託雲龍説迂怪」（八一頁～八二頁）に対比する六字一句の逸失を大胆に仮説しているが、「もちろん敦煌本はじめ私の閲し得た限りの板本には、一句の逸失を証明できるような痕跡は全く無い」とも言ってられるように、これにも相当の無理があろう。やはり三字の対偶に解する方が無難では無いだろうか。

「豐隆求宓妃、鴆鳥媒娀女、詭異之辭也」唐写本は豊の上に駕の字が、鴆の上に憑の字がある。『楊校』は「無ければ辞意不明」と。戸田はすんなりとヲシテと訓んでいる。興膳もシテ、セシムルと訓んでいる。日本語のしなやかさよ、その有り難さとでも言おうか。離騒の本文には豊と鴆の上にそれぞれ令の字がある。使役・受身・仮定形の字は確かに屡々省略されるとしても、この場合それが無ければ豊隆と鴆鳥が主語になってしまうのでやはりまずい。原文にはそれぞれの令の上に吾という主語が置かれている。ここは六字句対偶の駢文だから、各句に一字の付加は確かに不可欠であろう。戸田の弁騒篇の余説に詳解がある。

「康回傾地、夷羿斃日、木夫九首、土伯三目、譎怪之談也」「案彦和此文作「夷羿」、蓋涉天問「帝降夷羿、革孽夏氏」之語而混用、王逸此語注云「夷羿、諸侯、弑夏后相者也」是夷羿乃弑夏后相之有窮后羿、與堯時射日之羿截然爲二人。論語憲問「羿善射」孔注「羿、有窮國之君、簒夏后相之位、其臣寒浞殺之」」と『斠詮』にある。離騒の本文の「羿淫遊以佚畋兮」の洪興祖の補注にも「帝嚳時有羿、堯時亦有羿、羿是善射之號、此羿商時諸侯有窮后也」と同じような記述がある。

高辛氏の時の羿は遊び好きの狩り道楽だから弓の名人でもあったのだろう。太陽を射落としたのは堯の時の羿だから夷羿では無かったと。劉勰は駢文の整句の文字の数合わせ（前句の康回（共工）との）のために勇み足をしてしまったのかもしれない。涙光社は『文心十論』（春風文芸出版社）に興味深い疑問を呈している「劉勰が退ける「譎詭」（正緯篇の賛の芟夷譎詭、採其雕蔚の譎詭を指す――筆者注）は、実際には奇異な題材の内容や大胆な誇張と幻想を包括していて、それらは紛れもなく通常には雕蔚（瑰麗多姿的文采――涙氏注）（先掲の賛の語――筆者注）と密接に関連していて区別しにくい。考えても見よ、『離騒』にもし劉勰が排斥する「詭異之辞」「譎怪之談」が無かったなら、あの「驚采絶豔」（「故能氣往轢古、辞來切今、驚采絶豔、難與並能矣」の弁騒篇の語――筆者注）もどうして産み出しえようか？詹鍈はこの面に対して認識不足と自己矛盾の点が有ることは、確かにはっきりしている」（一九六頁）と。一読すると、そのようにも思えないこともないが、これは涙氏が、正緯篇の譎詭と弁騒篇の譎詭を字面の上から同じものとして解した誤解である。正緯篇では、確かに芟夷（刈り取る）と言っているが、弁騒篇では、経書との異点を指摘しているだけで、排斥（原文は貶斥）などしていないのである。「詭異」「譎怪」こそが「驚采絶豔」を産出しているのである。

「木夫九首」「士伯三目」は《招魂》の「一夫九首……拔木九千株也」「土伯九約……而有三目」を劉勰が要略引用し駢文体に整句したもの。

「依彭咸之遺則、從子胥以自適、狷狹之志也」「狷狹」は「狷介偏狹之心志」と『斠詮』。「胸襟狹隘」と周振甫の『文心雕龍注釋』。自己に固執し過ぎてゆとりがない。片意地張。

「士女雜坐、亂而不分、指以爲樂、娛酒不廢、沉湎日夜、擧以爲懽、荒淫之意也」

「摘此四事、異乎經典者也」「摘此四事、指上四事皆怪異之文、然屈宋之旨、多託詞隱諷、此朱子所謂『生于繾綣惻怛、不能自已之至意』（楚辞集註の序文――筆者注）讀者不可不辨也」と『注訂』に言っている。屈言・宋玉らの隠晦諷諫の辞旨は、朱子が洞察しているように、悲痛誠心の情から生じたもので、止むに止まれぬ至高の熱意からだ、ということを読者は察してあげなさい、と言うのである。

「故論其典誥典如彼、語其夸誕則如此」彼・此は、経典に同異する前述の各四条を指す。「典誥は尚書に属するが、他の経書をも兼指する。風雅も詩経の専指ではない」と詹鍈。

「固知楚辞者、體憲於三代、而風雜於戰國」体の文は経典に同じきの、風の文は経典に異なる面を言っている、と『校證』にある。よって楚辞は、朴実（誇誕の反対語から採った）典雅の所は経典から、夸誕詭俗（時序篇の縱横家への評語から採った）の所は縱横家から学び取ったのだと知り得る、と。

「乃雅頌之博徒、而詞賦之英傑也」前代の経典に比べれば博徒（多少の破格を言うか？本篇冒頭部の「軒翥」の語を借れば地上の法の外に飛翔する者、つまり経典の枠内に収まら

ないという意味も含むだろうか？夸誕はその一例か？）で、後代の詞賦（前出の「辞家」の作品を指すであろう）に比べれば英傑（突出していることを言うか？「奮飛」もまた飛翔のイメージである。英雄豪傑は博徒に対しての意識的表現か？）だと。

「觀其骨鯁所樹、肌膚所附、雖取鎔經意、亦自鑄偉辭」内容と形式の両面からの楚辞の総評である。以下楚辞の各篇についての評をして、終わりにまた内実外華からの総評をなしている。人の身体各部の構造を文章の構造に比して論じるのは付会篇に「以情志爲神明、事義爲骨髓、辭采爲肌膚、宮商爲聲氣」とある。唐亦男の『文心雕龍講疏』（原本未見。本文は『義證』の一五五頁に拠る）に「『取鎔經意』與『骨鯁所樹』相呼應、是就屈原作品的『質』（内容）講。……而『自鑄偉辭』則是與『肌膚所附』相呼應、乃是就屈原作品的『文』（形式）講」と明解である。鎔を範式・法式の模範・規範の名詞に取れないこともない（鎔ヲ經意ニ取ル）が、全ての訳者は「取鎔スル」と動詞に解している。李曰剛は「擷取鎔化」と訳している。『札記』は「二語（後半の二句）最諦。異于經典者、固由自鑄其詞、同于≪風≫≪雅≫者、亦再經鎔煉、非徒貌取而已」と同異に解をしている。確かに『楚辞』の独創は、形式としての鋳辞にある。鎔煉だから縁語として鋳造となるのだろう。「文有可變革者、有不可變革者。可變革者、遺辭捶字、宅句安章、隨手之變、人各不同。不可變革者、規矩法律、是也」と通変篇の黄侃の『札記』にある。劉勰の通変篇の賛語にも「文律運周、日新其業。變則可久、通則不乏。趨時必果、乘機無怯。望今制奇、参古定法」とある。また劉永濟も通変篇の『校釋』に「舍人論文、每反復於奇貞華實之間。奇華者、采之外彰者也。貞實者、道之内蘊者也。屈子『取鎔經旨』、故不失其眞、不墜其實。屈賦『自鑄偉辭』、故可酌其奇、可翫其華」と言う。これら三者の文に加える気利語を筆者は持たない。

「故騷經九章、朗麗以哀志」朗麗は鮮麗、顕朗華麗と『語詞通釈』にある。鮮明華麗、あざやかな美しさ。

「九歌九辨、綺靡以傷情」綺靡は、陸機「文賦」に「詩緣情而綺靡、賦體物而瀏亮」と有名な一句があり、李善は精妙の言、瀏亮は清明の称と注している。情だから妙であり、物（事・理）だから明だと言うのであろう。心情は微妙であり、物理は明晰であるから。つまりは、微妙細膩な艶麗の意味か。『語詞通釈』に艶麗柔靡とある、この柔靡（美）である。人情の機微という俗語があるが、この機微に近いニウアンスか。和語では、こまやかさをつつみこんだなめらかでやわらかであでやかなうつくしさ、とでもなろうか。

「遠游天問、瓌詭而惠巧」「瓌」、瑰的異體字、奇偉」と詹鍈。「詭奇譎怪」と『語詞通釈』。確かにこの二篇は、取り分けて奇々怪々である。

「招魂大招、耀豔而深華」戸田の訳本の語釈に、大招はもと招隠に作っているが、敦煌本に従って大招がいいとある。大方の龍學の校註家は、招隠を大招に作るを是とする。中国

屈原学会会長の湯炳正の「『楚辞』成書の探索」（『屈賦新探』所収）もそれを認めている、と我が国の楚辞学者の竹治貞夫は言う。しかし、竹治は招魂招隠が好いことを三点から傍証している。「『楚辞釈文』をめぐる問題点」（『徳島文理大学文学論叢』第十号所収）（pp 63～pp 65）の主張には、傾耳の価値があると筆者は考える。一九九一年六月の端午節に屈原ゆかりの岳陽市で「国際屈原学術討論会」が開かれた折りに、竹治先生も招かれ、その後、お二人は学術の親交を結ばれ、楚辞学の問題点について頻繁に書簡を交わされ、筆者もそれを逐一拝見させていただいた。その中にこの招魂招隠の問題もあった。畏敬する先達の竹治師は九七年年末に不帰の客となられた。この場を借りてご冥福をお祈りする。

深華は唐写本は采華に作る。その譌化の経緯を『楊校』は推測して、采を是だと説いている。本節の終句の「驚采絶豔」にも通じて、この方が落ち着きは好いとは思う。ところが、このままで好いという見解もある。張立齋の『文心雕龍考異』（以下『考異』と略称）である。「耀艶、文采外發也。深華、文采内蘊也。外發故曰耀、内蘊故曰深。深者、藏也。≪考工記≫『梓人必深其爪』即藏其爪也。采、採、彩互通、與『耀』字不協、從『深』是、楊校非」と。文采に内外の美（艶華）が有ると。采は耀と協（叶）韻しないと。一見魅力ある提言だが、こういう見解にどこまで信憑性が有るのかは、判断が難しい。耀艶と采華では、確かに重複の観は免れない。この張立齋の文に次いで詹鍈は楊慎（字は用脩、斎号は升菴）の次のような批文（これについては『斠詮』の「附録六　文心雕龍板本考略」の③④⑥（二四九七頁以下）と『義證』の「≪文心雕龍≫板本敍録」四、九、十、十一を参看されたし――筆者注）を引いている。「耀艶深華四字、尤盡二篇妙處、故重圈之。皮日休評≪楚辞≫幽秀古艶、亦與此相表裏、予稍易之云≪招魂≫耀艶而深華、≪招隠≫幽秀而古朗」圈は圈点、批点のこと。五色の圈点が有ったことが窺える（『義證』一四頁参看）。皮日休の幽秀を楊慎は深秀に解しているのである。ならば古艶は耀艶に通って、相い表裏（張立齋の語では外内）することになると言いたいのだろう。稍易（僅少改変）と言っているように、二篇に配して艶を朗に変えただけだが、艶の重複を避けたのだろう。朗とは、恐らく「大招」の各節の終わりから二句めの「魂乎歸徠」（魂よ帰り来よ）と悲痛に連呼朗吟するその一句を意識しているかもしれない。

「卜居標放言之致、漁父寄獨往之才」放言の解は訳者によって区々だが、ここには、詹鍈の「放言、暢所欲言、不受拘束。≪晉書・夏侯湛≫「莊周駘蕩以放言」」を挙げておこう。それは、下句の「独往」（典拠は荘子）と相呼応するだろうから。独往独来は「拘束を受けない」屈言の独行の精神への讃美である。

「故能氣往轢古、辭來切今」気については、神気（目加田）、精気（興膳）、気力（戸田）下句の辭の字と対して内容面での気勢、気概（牟世金）、才気（周振甫）、気勢（李曰剛）（王更生）等の訳がある。辞は形式面の修辞。気力、修辞共に

古今に冠絶すると。「気」について、考え始めると、いつも気が重い。文学理論のこの常用術語が含む範囲は広い。自然の大気、それが人の身体に入って生命維持の気となり、人格精神にも及んで行く。作品は人の精神世界の産物だから、当然作品には作者の気が有形無形に反映することになる。これが、古来から考えられて来た気の道筋である。気について論じたものは無数で、記憶に残るものも多いが、銭仲聯の「釋気」（『古代文学理論研究』第五輯、上海古籍出版社）は、博学故の目配りが利いていて、無知な私などには非常に有益で啓発される点が多々あった。まとめの文章は、現代の批評理論を以て古代の文学を理解したような気になってしまう私のような者には頂門の一針であった。興味ある方は、是非御一読を。まだ四十代の半ばの生意気盛りに、学会で初めてお会いした銭氏は、小柄な好々爺然としたお人だった。私たちを歓迎する漢詩をご披露してくださった。

「驚采絶豔、難與并能矣」更にもう一回、修辞の面での独抜性を強調する。以上の点から、楚辞が枢紐論に採用されたのだということが、好く理解できる四句である。

［四］自九懐以下、遽躡其迹。而屈宋逸步、莫之能迫。故其、敘情怨則鬱伊而易感、述離居則愴快難懐、論山水則循聲而得貌、言節候則披文而見時。是以枚賈追風以入麗、馬揚沿波而得奇。其衣被詞人、非一代也。故才高者菀其鴻裁、中巧者獵其艶辭、吟諷者銜其山川、童蒙者拾其香草。若能憑軾以倚雅頌、懸轡以馭楚篇、酌奇而不失其眞、翫華而不墜其實、則顧盼可以驅辭力、欬唾可以窮文致。亦不復乞靈於長卿、假寵於子淵矣（九懐自リ以下、遽カニ其ノ迹ヲ躡メドモ。而モ屈・宋ノ逸歩ハ、之ヲ能ク迫フ莫シ。故ニ其ノ情怨ヲ敘ブレバ、則チ鬱伊トシテ而シテ感ジ易ク、離居ヲ述ブレバ則チ愴快トシテ懐ヒ難ク、山水ヲ論ズレバ則チ聲ニ循ヒテ而シテ貌ヲ得、節候ヲ言ヘバ則チ文ヲ披キテ而シテ時ヲ見ルナリ。是ヲ以テ枚・賈ハ風ヲ追ヒテ以テ麗ニ入リ、馬・揚ハ波ニ沿ヒテ而シテ奇ヲ得タリ。其詞人ヲ衣被スルコト、一代ニ非ザルナリ。故ニ才ノ高キ者ハ其ノ鴻裁ヲ菀メ、中巧ナル者ハ其ノ艶辭ヲ獵リ、吟諷スル者ハ其ノ山川ヲ銜ミ、童蒙ナル者ハ其ノ香草ヲ拾フナリ。若シ能ク軾ニ憑リテ以テ雅頌ニ倚リ、轡ヲ懸ケテ以テ楚篇ヲ馭シ、奇ヲ酌ミテ而シテ其ノ眞ヲ失ハズ、華ヲ翫ビテ而シテ其ノ實ヲ墜サザレバ、則チ顧盼シテ以テ辭カヲ驅ルベク、欬唾シテ以テ文致ヲ窮ムベシ。亦タ復タ靈ヲ長卿ニ乞ヒ、寵ヲ子淵ニ假ラザルナリ）

「九懐以下、遽躡其迹」前掲の竹治論文に「劉勰は王逸『楚辞章句』の古本に拠って「弁騒篇」を作ったが、その篇次は『釈文』に見えるもので、『招魂』第十までの十篇は屈原作八篇、宋玉作二篇、淮南少山作一篇より成り、詩形・内容とも

に創意に満ちたもので文芸的価値が高い。これに対して『九懐』第十一以下の七篇は漢人の模擬作で創意に乏しく、その内の二篇（『惜誓』『大招』）は王逸も作者に疑いを存している。そこで劉氏は上の十篇を取りあげて論評し、下の七篇は「自九懐以下」と一括して退けた。『招隠士』は上の十篇に属し、『大招』は「九懐より以下」に含まれている」とある。

「而屈宋逸歩、莫之能追」この一句から推測すれば、九懐の前に漢代の淮南少山の作が有るのは奇異だと言うのが、校注家の大方の見解である。その点に関して竹治は不問に付している。大招と招隠士の作品の優劣の比較の立場からの見方も、今後もっと検討されて好い問題であろう。

「故其、叙情怨則鬱伊而易感、述離居則愴怏難懐、論山水則循聲而得貌、言節候則披文而見時」怨恨・離別・山水・節候の四点から屈原・宋玉の作品が後人のそれを凌ぐことを述べる。情怨は、内心哀怨、と李曰剛。離開は、追放されて国都を離れること、と詹鍈。山水は、「九歌」「九章」に山水描写が有り、就中、江水描写が多い、と詹鍈。抒情・叙景の両面からの優れた描写力への讃美である。「論山水則循聲而得貌、言節候則披文而見時、此極眞之文也。若緯書祗偽、惑矣、烏能眞！」と『義證』に引く曹學佺の批文にある。屈・宋の辞賦こそ真を極めた文であり、緯書の如きは只だ偽惑そのもので、真のかけらもない、と激賞しているのだろう。このような山水自然の豊かな描写力が、後世の謝霊運などの山水描写の「真」へと結実して行くのだろう。

「是以枚賈追風以入麗、馬揚沿波而得奇」『漢書』藝文志詩賦略に「漢興枚乘、司馬相如、下及揚子雲、競爲侈麗閎衍之詞、没其風諭之義」と。序志篇に「辭人愛奇、言貴浮詭」と。屈・宋の驚采絶艶の余風を追い余波に沿ったのがこの四辞人であった。

「其衣被詞人、非一代也」上のように、詞人への影響（衣被覆蓋）は当世だけのものでは無かった。沈約の『宋書』謝靈運傳論の「源其飆流所始、莫不同祖風騷」である。

「故才高者菀其鴻裁」菀の字について、「疑菀即捥之假字、集韻捥取也」と范文瀾。『校證』と『楊校』に類似の長い説解がある。一言すれば、菀は苑に通じ苑囿の意だと。潘重規の『唐寫文心雕龍殘本合校』に「苑囿字、六朝人往往書作『菀』、此菀即『範』也。宛囿用作動詞、蓋範圍包括之意」と。宛囿の語は『文心雕龍』に数例あり、『語詞通釈』に「本為畜養禽獸、草木的園地。用作動詞、表示「〈（如同畜養禽獸、包籠草木那様地）包籠（或籠括）〉義」とある。以上を纏めれば、本来、鳥や獣、植物を飼育栽培する為に設けられた園地のことで、その囲いが範囲となり、囲い込むとか囲い取るとかいう動詞に転義していったと言うのである。李曰剛は「蘊蓄」、王更生は「蘊積（模倣、取法）」、郭晉稀は「倣法」、牟世金、周振甫は同じく「吸取」（吸収摂取か？）と訳している。戸田は「菀（あつ）め」と訓じ、「手中のものとし」、興膳は「摂取し」、目加田は「わがものにし」と訳している。これらは、範囲の拡大転義解釈というか意訳に傾いている。

「中巧者獵其艶辭」中巧は心巧なり、と范文瀾と黄侃は心懐に取る。欺波は的中の中だと。射的だから下字が猟だと。その伝で行けば下句も吟だから銜（含）だということにもなろうか。銜は含咏の意だと詹鍈。

「童蒙者拾其香草」『義證』に引く楊慎の批文に「拾其香草、大奇句也」とある。『講疏』には、各種の博物の知識を学び得るということで、孔子の庭訓の「詩経から鳥獣草木の名を多く識り得る」を続掲している。楚辞の中から秀文名句を収拾する、というのがごく普通の解だろう。『義證』に魯迅の『摩羅詩力説』を引いているが、その後半部を揚げれば「劉彦和所謂「才高者菀其鴻裁、中巧者獵其艶辭、吟諷者銜其山川、童蒙者拾其香草」皆著意外形、不渉内質。孤偉自死、社會依然。四語之中、函深哀焉」（『墳』『全集』第一巻）後世の者らが、屈言の作品の外華（修辞）だけに着意して、内実（精神）に渉及しないことへの魯迅の批判である。「孤偉自死、社會依然」はまた魯迅その人のものでもあった。劉勰は、この四句に深遠な哀憐を篭めているのだと。

「若能憑軾以倚雅頌、懸轡以馭楚篇」本文と次文が仮定法の文となり下の則に係る。則以下が結論である。詩経という車に乗り、楚辞という馬を御す。

「酌奇而不失其眞、翫華而不墜其實」奇華を酌翫しつつ真実を失墜するなと。魯迅が先述しているように、劉勰の本意はあくまで内容の真実性（雅正、実質）に重きが置かれているが、楚辞の奇抜性、華美性を取り込みつつ、という留保付きである。

「則顧盼可以驅辭力、欬唾可以窮文致」目と口に依る形式・内容両面からの貪欲な摂取によって、それを自己の創作へ役立て、糧とすること。

「亦不復乞靈於長卿、假寵於子淵矣」霊感や恩寵を司馬相如や王褒に求めたり借りたりする必要はさらさら無い、と。霊感と恩寵を互文にした訳をしてみた。

贊曰、不有屈原、豈見離騒。驚才風逸、壯志烟高。山川無極、情理實勞。金相玉式、艶溢錙毫（贊ニ曰ク、屈原有ラザレバ、豈ニ離騒ヲ見ンヤ。驚才ハ風ノゴトク逸く、壯志ハ烟ノゴトク高ク。山川ハ極マリ無ク、情理ハ實ニ勞カナリ。金相ト玉式ハ艶トシテ錙毫ニ溢ル、ト）

「不有屈原、豈見離騒」屈原と離騒の関係は、半ば運命的、宿命的なものである、と。

「驚才風逸、壯志烟高」唐写本に志は采に作る。『斠詮』に「才華驚世、電掣風飆（風＋焱）。辭采壯麗、煙飛雲高」とある。

「山川無極、情理實勞」自然は無限にして、それを追いかける心もまた遼遠。労を煩労の意味に解すると、前句の「驚才」・「壯志」、下句の「艶溢錙毫」などと釣り合いが取れなくなり、消極に傾くので詩・小雅・漸漸之石の「山川悠遠、維其勞矣」の孔疏の遼遠説を採った。勿論、劉勰もこの詩経の

一句を借りたに違いない。

「金相玉式、艶溢錙毫」『斠詮』に「精金本質、美玉外雕。豔巧四溢、不間分毫」と。

李曰剛『文心雕龍斠詮』直解書き下し文

辨騷第五（一六〇頁～一九二頁）

壹（一六〇頁）

周室は東遷し王綱は失墜して自り遒人太師は再た歌謡を采獻せず。風雅の詩聲は焉に於て寢息す。復た人の其の余緒を繼起して収拾すること有る無きなり。奇偉の文辭の此を繼ぎて鬱勃として起る者は、其れ屈子の忠君憂國の思を發舒するを爲すの離騷なるか。

離騷の作は固より已に衰周の詩人の後に高舉し、亦た復た炎漢の賦家の前に突飛するなり。豈に聖王の世を距離たるの未だ遠からざるを以てして、楚國又た俊才多きか。

貳（一六二頁～一六四頁）

往昔、漢の武帝は離騷を愛好し、而して淮南王劉安は傳を作れり。以爲へらく、國風は異性を怨誹するの情を宣洩するも而も邪淫に流れず。小雅は時政を愛慕するの情を發抒するも而も暴亂に形はれず。離騷の文辭の若きは此の二者の特色有るを兼ねたりと謂ふ可し。屈子は昏闇の世に仕へて能く超然として穢濁の中より解脱し、塵俗の外に周游して奸小と同流合汚せず。一身の清白は蟬の外皮を蛻去して純質を保持し、玉の涅泥に染まりて本色を變へざるに似る有り。

其の品格の高潔は即使ひ日月と光輝を争奪するも斯れ亦た可ならん、と。班固は似爲へらく、屈原は才華を露顯し一己の美行を表揚して、懐王の疎遠を怨恨して自ら汨羅江に沈めり、と。

離騷に賦す所の夏の諸侯の有窮の后羿の淫游逸畋なるに、其の相の寒浞は之を殺して其の妻を娶り、生まれし子の過澆は縱欲にして亂を爲し、而して夏の后相を殺して夫の夏少康と有虞に逃奔し、虞は妻すに二姚を以てするのことは左傳に記す所と符號せず。

又た以爲へらく、屈宋は多く崑崙懸圃を稱するも、經典大義の記載する所に非ず、と。然れども其の文辭は華麗典雅にして辭賦の本源と成爲す。

作者は聖明睿哲に非ずと雖も、亦た神妙の絶才と謂ふ可し。王逸は以爲へらく、詩經の作者は耳提面命し、旨は懇切教誨に在り。而して屈原の語は摯に情は眞にして婉順諷諭に長ず。蓋し離騷の文辭は經典に依託して大義に立言す。譬へば謂ふ所の「玉虬に乘りて鳳を駕す」が如きは、即ち易經の乾卦の彖辭の「時に依り六龍に乘駕して以て上下四方を統御す」の義なり。謂ふ所の「崑崙に登りて流沙を涉る」とは即ち書經の禹貢の「禹は九州の土を布治す」の義なり。所以に名儒學者は辭賦を寫作するに其の風範を模擬せざる無きは謂ふ所の「金相玉質にして辭は典に義は雅にして、百代以下比匹有る無

き」者なり、と。漢の宣帝劉詢は楚辭を吟唱するに及ぶに至りて讃美して置かず。以爲へらく、其の文義は皆な經典の道術に合す、と。

揚雄は屈賦を諷詠して玩味加ふる有り。亦た其の體式は多く詩經の雅頌に同じと稱す。淮南王劉安・王逸・漢宣帝劉詢・揚雄ら四家は擧げて以て經義に相ひ比す。而るに玩固は其の左傳に合はずと謂ひて或ひは褒美し或ひは泛責す。皆な意に任せて言談して或ひは譴抑し或ひは稱揚するも亦た實際に超過す。鑒賞して精審せず、玩味して未だ實を覈せざる者と謂ふ可し。

參（一七二頁～一七三頁）

離騷の意旨を考覈して加ふるに評論を以てせんと欲すれば、必ず先づ證驗を作品の本文に求むるなり。諸れ唐堯・虞舜の光明聖大なるを陳述し、夏禹・商湯の畏天敬賢なるを稱道するが如きは、典謨訓誥の若き體制有るなり。夏桀・商紂の猖狂妄亂なるを譏刺し、后羿・過澆の顛倒隕亡なるを悲傷するは則ち是れ規勸諷諫の意旨なり。虬龍を以て清白の君子に比喩し、雲蜺を以て讒邪佞人に譬況するは、此れ詩經の比興の義法を爲すなり。

離騷に謂ふ「太息して涕を掩ひ、民生の多艱を哀れむ」と。九辯に謂ふ「鬱陶として君を思ひ、君門の九重を歎ず」と。又た忠貞憂怨に係るの辭氣なり。今茲に述ぶる所の四事を觀看すれば、正に詩經の風雅と相ひ同じきの意義有るなり。

八龍を駕して雲旗を載するに假託して、怪異迂大の事を敍説し、雲神の豐隆を駕駛して以て神女の宓妃を進求し、運日の鴆鳥に依憑して以て有娀の美女に媒せしむると説くは、皆な詭謾奇異の語詞なり。

又た共工康回は地柱を觸倒し、射手后羿は九日を射落し、拔木の丈夫は一身九頭、土神侯伯は虎首三目と言ふは皆な譎詐怪異の談説なり。殷の賢臣の彭咸の投水諫死して遺留する所の法則に依循するを願ひ、呉の大夫の伍員の大江に棄尸して以て自から其の旨意に隨從せんと欲するは、皆な狷介偏狹の心志なり。男女は雜坐し錯亂して別無きを指して樂趣と爲し、飲酒に耽樂し晝夜沈湎して挙げて歡娛と爲すと言ふは、乃ち荒亂淫靡の思想なり。以上に敍ぶる所の四事を摘引すれば則ち經典と相ひ異なること有るの分野なり。故に其の典謨訓誥の體制を論ずれば則ち彼の如く、其の浮夸虛誕を語れば乃ち此くの如し。固（まこと）に知る、楚辭は其の體裁は乃ち法を三代五經の雅正に取り、而して其の作風は七國諸子の詭術に參合するに係る。雅頌中に在りては博奕の徒に屬すと雖も、而も詞賦中に在りては則ち英傑の作なることを。

肆（一八一頁）

屈子の作品を試觀するに、其の骨鯁の樹立する所の事義、肌膚の附麗（リ）する所の辭采は、經典の旨意を擷取鎔化すると雖も又た奇偉の文辭を自行鑄造す。

是の離騷・九章の明朗昳麗を用いて、以て哀怨の心志を表

達す。九歌・九辯は綺錯靡曼にして、以て悲傷の感情を申述す。遠游・天問は、瓌奇詭異にして而して知恵は巧妙なり。招魂・大招は、光耀豔射にして辭采は華美なり。卜居は放言高論の致趣を標榜し、漁父は獨往遺世の才情を寄託す。能く氣勢を用いるは一往して前に無く、以て歴古を陵踐し、辭章は其の來るや自る有りて自然に當今に切合す。驚人の采藻、絶世の豔麗は、後の辭人の能く之と并び駕し齊しく驅け難きなり。

伍（一八六頁～一八七頁）

王褒の屈原を贊美して其の人を思憫して九懷を作りて自り以後、作者は皆な騷辭の風格を追踪するに急なり。然り而して屈原・宋玉の超邁の境界は猶ほ之れ良駿の逸足の如く奔驅絶塵して均しく能く之を追及するもの莫きなり。蓋し屈宋の騷辭は内心の哀怨を抒叙すれば則ち抑鬱晞歔にして而して人をして感動せしめ易く、故國の離愁を描述すれば則ち悲愴悵惘にして而して以て人をして忘懷せしめ難く、山明水秀を論列すれば則ち聲調に依循して其の面貌を得るを識るべく、季節氣候に言及すれば則ち文字を披覧して其の時令を察見すべし。此れに因りて枚乘・賈誼は其の風格を追摹して以て華麗に進入し、司馬相如・揚雄は其の波流を沿襲して而して瑰奇を獲得す。其の惠を詞賦の作家に加ふるは、豈に止だ一世一代のみならんや。

所以に才性の高妙なる者は屈宋の鴻偉の體裁を蘊蓄し、心思の靈巧なる者は屈宋の豔麗の辭華を獵取し、吟味諷誦の者は其の登渉する所の靈山神水を胸中に苞含し、學童啓蒙の者は其の餐佩する所の香花芳草を眼底に拾取す。

創作時に果して能く一面には雅頌に倚據して以て義を立つれば則ち乘車の横木に憑藉するが如くして身を保持して平穩に坐し、一面には楚騷を駕馭して以て砌辭なるは亦た走馬の韁索を懸持して歩を調節して驟らすこと安和に、其の奇誕を酌取して其の雅正を喪失せず、其の華麗を翫味して其の實質を墮落せざれば、是に於て縱目顧盼して以て遣辭を驅り氣力を翰ばし、信口欬唾して以て文章の情致を極盡すべし。亦た須らずしも靈感を司馬相如に乞求し、恩寵を王褒子淵に假借すること無きなり。

陸（一九一頁～一九二頁）

贊詞に曰ふ

梃生の荆楚に屈原は人の豪にして、奇文は鬱として起り乃ち離騷を見る

才華は世を驚かすこと電掣風飈の如く、

辭采は壯麗にして煙は飛び雲は高し

山川の景色は逍遥に邊り無く、文思の情理は實に亦た闊遼なり

精金の本質・美玉の外雕、豔澤は四もに溢れ、分毫も間てず

『文心雕龍』試訳

弁騒第五

『詩経』の雅歌が途絶えて以後、それを引き継ぐ者は現われなかった。そこに鬱勃として興ったのが新奇な文学すなわち屈原の『離騒』であった。まこと詩経の詩人の後に翼を拡げ、漢代の賦家の前を高く飛んでいる。聖人を隔たること幾ばくもなく、また楚の国の人の多才の故でもあろうか。

往昔、漢の武帝は『離騒』を愛好し、淮南王劉安に命じてその解説を作らせた。王の言うには「国風は男女の情愛を歌いながらも淫らにならず、小雅は失政を怨嗟非難したものが多いながらも度を失わない。『離騒』は性と政治に対して『詩経』と同じようにバランスが取れていると言える。また屈原は汚濁塵埃の世から離脱高飛し、世の汚れに染まることなく、その高潔な人格は日月にも匹敵する者なり、と。班固の考えでは「屈原は、自己顕示欲が強く、世の中が意のままにならぬと、怒りを露わにして入水してしまった。作品は、歴史記述に違背して虚構の押し売りをしている。とはいっても、その文章は外華内実兼備の秀作で、実に後世の詩賦の宗祖たるに相応しい。保身には罔かったが、才能溢れる人であった」と。王逸の思い入れは「詩経の詩人は為政者に対して強引な所もあるが、屈言の諫言は寛容穏和だった。『離騒』の文章は、経書に拠って構成されている。例えば「四頭の虬に引かせて翳（鳳凰）に乗る」は、『易経』の「時として六匹の龍に乗る」に拠る。「崑崙・流沙（砂漠）の地名は、『書経』の禹貢の治州記録に拠る。後の名だたる学者の辞賦は、これを目標としている。これこそ内実外華兼備の作で、長く比べるべきものの無い傑作と言える」ほどであった。漢の宣帝になると「『楚辞』は、経学にかなっている」と嘆賞しきりであるし、揚雄は「『楚辞』を朗吟味読して、本意は『詩経』と変わらない」とまで言っている。劉安ら四人は経書との類似を褒めそやし、班固だけは左伝に合わぬと非難している。褒めるも貶すもその場凌ぎで、持ち上げるも扱き下ろすも行き当たりばったり、これでは鑑賞も玩味も精審確実とは言い難い。

評価の論証の精審確実さを求めようとするなら、原典を愚直に熟読玩味するのが一番だ。堯・舜の光明正大さを陳述し、夏の禹王・殷の湯王の恭謹敬虔さを称揚するのは、『書経』の典誥の様式である。桀王・紂王の不軌を謗り、羿・澆の落首を悼むのは、『詩経』の諷諫の趣旨である。虬や龍を君子に、雲や蜺を悪人に譬えるのは、『詩経』の比や興の喩法である。「民衆の多難に落涙し」「君側に奸佞の厳囲するを嘆く」のは、忠誠と怨嗟の言辞である。この四件が、楚辞と詩経の類似共通点である。片や、雲や龍に託して奇怪を説き、雲師に命じて神女を探させ、鴆鳥に媒人をさせたりするのは、荒唐の談であり、共工が大地を傾け、羿が太陽を射落とし、九つ頭の怪力、三つ目の怪物なども無稽の話である。彭咸の遺訓に則って諫死しようとか、伍員の自適に倣って悠遊しようとかするのは、融通の利かないことだ。男女の雑座痴戯を楽しみと

し、昼夜酒に沈湎して乱痴気騒ぎをするのは、行き過ぎもい
い所。この四件が、楚辞と詩経の食い違う点である。そうい
う訳で、楚辞の中で経典との類似を論ずれば前の雅麗真摯性
の四件であり、その違背を論ずれば後の奇抜異常性の四件で
ある。以上から確かなことは、楚辞は、その体式は夏・殷・
周の三代を模範とし、作風には、戦国の縦横家の無頼が混入
しているということである。だから、楚辞は詩経から見れば
申し子とまでは言えなくとも、後代の辞賦から見れば堂々と
した偉丈夫である。その内容（内実）や形式（外華）が樹立
付帯しているものをとくと観れば、根っ子を経典から取り込
み、枝葉を育てあげ見事な華を咲かせたと言える。「離騒」や
「九章」は、朗（鮮明）辞典麗の中に悲哀を籠め、「九歌」や
「九辯」は、綺語美麗の中に傷心を託し、「遠遊」や「天問」
は、奇辞怪怪の中に才知を秘め、「招魂」や「大招」は、濃辞
艶麗の中に淵華を湛え、「卜居」は、逆世（逆しまな世の意）
批判の徹底放言を標榜し、「漁父」は、孤高独歩の意気軒昂の
才知を言寄せている。だから、その気概では古代の文章を轢
殺し、辞章では当今の作品に開路する。とりわけ、その驚人
絶世の采藻艶麗の点では、後世の辞人でこれと肩を並べ得る
者はいない。

王褒が屈言を讃美哀憐して「九懐」を作って以後、我先に
と、多くの作家がその風格を追い真似たが、屈原・宋玉の俊
足には、及びもつかなかった。なぜならば、二人が哀怨の情
を叙べれば、読者は心鬱結して感動し、故国との離愁を述べ
れば、読者の悲哀は深く沈潜し、自然を歌えば、読者はさな
がら自然を想像し、季節を語るに、読者は本を開けば目の当
たりに時節を感じるほどの抜群の描写力だからである。

だから枚乗や賈誼は、屈原と宋玉の風格を追って華麗に耽
溺し、司馬相如や揚雄は、その流れに沿って新奇さを獲得し
た。『楚辞』が後世の文学者へ与えた恵沢は、その時代だけに
止まるものでは無かった。というわけで、才能溢れる者は、
そこから偉大な構想を温め、英知豊かな者は、そこから華麗
な艶辞を射落とし、朗吟高き者は、そこから自然の風物を口
ずさみ、知識不足の者は、博物の（比喩の）語彙を身に着け
たりして、その恩恵は計り知れなかった。創作時に、もし『詩
経』という車に乗り沿い安座して、『楚辞』という馬の轡を取
り捌き調和しながら、その内実・外華を兼ねて酌み味わい、
その真実を手中にし得たなら、自己の身体の生理のように自
由自在に文辞を使い熟すことも不可能ではない。そうなれば
もうしめたもの、霊感や恩寵を司馬相如や王褒からわざわざ
求め借ることも不要になる。

要説すれば

よもや屈原いまさずば　宿命の作『離騒』この世に有り
得じ
驚異の英知は飈風と馳せ　壮大な志気は雲煙と見紛うほ
どに
自然山川は創作の無限の宝庫　そを逐う創作意欲もまた

遼遠
人物作品兼て金の麗質・宝の典範　辞藻艶麗は筆端にも
溢る

以上で『文心雕龍』の冒頭五篇の文の枢紐論の雑説を一応終える。順序からすれば、次に六篇から二十五篇までの文体論に論及することになるが、これらの諸篇は、初学者向けの文体の解説であって、本書の中では、さして重要ではない篇に思える。そのため、この諸篇の雑説は、今は措いて、次回からは下篇の創作論に入ることを予告して本拙論を閉じる。

（一九九九・〇八・二五）